うつせみのあなたに
短文集　その３

星野廉

目次

直線上で迷う夜
＊ 3

言葉が降りてくる、言葉が湧いてくる、言葉をいただく
＊ 9

「見る」に取り憑かれる
＊ 15

同じ形をした音を星のようにちりばめる
＊ 21

言葉こそが最強の嗜好品であり、最強の薬物かもしれない
＊ 27

数学の修辞学
＊ 33

あなどれない話
＊ 39

晴れて自分と対面するとき
＊ 47

ぜんぶ「うつる」と読んでください
＊ 51

人のつくるものは人に似ている
＊ 57

人のつくるものに人が似ていく
＊ 63

人が物語を真似る
＊ 67

真似てつくったものを真似る

＊ 71

うつったものに似せる、うつったものに似てくる
＊ 77

究極の「似ている」
＊ 83

中身とづらがずれているという話
＊ 89

見られていない気配
＊ 93

スクリーン越しに
＊ 99

私は言葉
＊ 107

とっかかり
＊ 113

私は言葉である
＊ 121

VR で自分に会いにいったその帰りに
＊ 129

figure のかたち
＊ 135

魔法のバトンは回る
＊ 141

夜になると「何か」を手なずけようとする
＊ 147

直線上で迷う夜

＊

初めて水面や鏡を見たときの、人類という意味での人や個人としての人のようすを想像すると軽い目まいを覚えます。びっくりしたでしょうね。ぶったまげたでしょうね。鏡像に慣れ親しんでいるいまの人や自分の想像をこえた体験だといえそうです。

その体験を「見る」という言葉で片づけていいのか、はなはだ疑問です。本当に「見た」のでしょうか？　そもそも「見る」余裕などあったのでしょうか？　寝入り際にとりとめのない思いにふけるとき、そういう空想をよくするのですが、寝際ですからぜんぜん論理的な思考（お気づきのとおり、私のもっとも苦手とするもので自分にはないに等しいと感じています）は働いていないもようです。

＊

昨夜は写真機や写真が発明されて間もないころの人たちがどんな反応をしたかなんて考えていました。真剣に考えると目がさえてしまうので、肩の力を抜いて思いをめぐらしていたのですが、次のようなことを思いました。

ひょっとして、枠に気づいたのではないか、と。

古い写真機のファインダーに相当する部分から覗きこんで、被写体のうつり――これは「写る」なのか「映る」なのか分かりません、寝入り際には辞書や用字用語集はつかえないのです――ぐあいを確認するさいに、枠があることに気づいたのではないでしょうか。現像した写真にも枠がありますね。

絵も洞窟の壁や地面に描いていたときには、枠は意識しなかったと想像しますが、板や布や紙のたぐいのうえに描くとなると、端っこがあるわけで、それが枠になりそうです。ああ、視界には枠があるんだ。そういう言葉で思ったかどうかは知るよしもありませんが、自分の目の視界や視野というものを感じた、つまり初めて意識したのではないでしょうか。

＊

いま自宅の居間にいる私は自分の視界を意識しようと努めているのですが、その視界がどんな形をしているのか、さっぱり見当がつきません。みなさんはどうですか？　横長であるという気はしますが、長方形だという感じはありません。横に長い楕円形みたいにも感じられます。

そう考えると、映画やテレビやＰＣの画面に似ていますね。本は縦長ですが、見開くと横に長いようです。昔の巻物もそうでした。人の頭というか意識の中には長方形の枠があるのではないかと疑りたくなります。それをなぞるというか真似て、物をつくっているのではないか。私たちは長方形に囲まれていませんか？

生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、ＰＣ、スマホ.....。人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

人は自分（あるいは自分の中にあるもの）に似たものをつくり、しだいにその自分のつくったものに似てくる、似せてくる、とつねに感じているのですが、人は「自分のつくったもの」に「自分もどき」を見て初めて、「自分そのもの」に気づくのではないか、なんて考えてしまいました。

そのひとつが長方形の枠ではないでしょうか。

＊

人は自分が「どう見ているか」とか、自分に「どう見えているか」が分からないのではないでしょうか。たぶんいまも分からないし、きっと昔々も分かっていなかった、のでは？

「見るためのもの」（視覚を補うもの）をつくって初めて、「自分がどう見ているか」とか、「自分にどう見えているか」に気づく。そんな気がしてなりません。ただし「気づいた」

けれど、「分からない」は続いているのです。

鏡、影、落書き、絵画、写真、映画（影や幻影の進化したもの）、テレビ、動画、ＶＲ。これほど人が「見る」に取り憑かれているのは、じつはいまだに「見えていない」からであり、その不十分な「見る」を補助するような物や仕組みや枠組みをつくるたびに、思いがけない、つまり想定外の「見る」や「見える」を見てしまい、驚き、ぶったまげ、何かにはっと気づく。そんなことを繰りかえしてきた気がします。

そう考えると、「見る」というのは「とりあえずつくった言葉」であり、その「見る」について、人は何も分かっていないのではないかというふうに思えます。「見る」「見える」という言葉をつくったから、「見る」「見える」んだ、うん、そうだ、と「決めた」とも言えそうです。

なにしろ、人は「○△Ｘ」という言葉をつくって、その次に「○△Ｘとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

＊

ここまでの文章を読みかえしましたが、なにぶんにも、寝入り際の思いを言葉にしたものなので、論理的ではないし――やっぱりねという感じ、この記事（小説のつもりなのですけど）のタイトルをご覧ください、正気の沙汰デーナイト――、とりとめがなく、飛躍も多いのに気づきます。じっさいには、もっととりとめのないものだった気がします。

イメージとしては長方形のお化けみたいな細長い道を迷いながら歩いているような――直線は迷路だという意味のことを書いたのはアラン・ロブ＝グリエについて論じていた蓮實重彦だったか――、えんえんと続く長方形の巻物とか、どんどんスクロールしながら読みすすむ液晶の超細長の画面を閲覧しているような気分なのです。

やはり直線をたどっていても右往左往はあるし停滞はあるし迂回はあるし迷います。直線をたどっているつもりとか直線上にいるつもりがそうではないというのは、日常的に経験していることなのかもしれません。本を読んで学んで嬉々として人に報告するような話ではないという意味です。学ぶのではなく気づくたぐいのものなのでしょう。

しかも、この気づきはぼーっとしているときに誰でも得られる気がします。そして忘れるのです。その繰り返し.....。知っている必要などないと体が知っているのかも知れません。

知というよりも痴、知るというより痴れる、知れるではなく。かつては知ると痴れるが同じだったなんて、しれっとしたしたり顔で言うつもりはなく、いまも知るは痴れると同居している気がします。知、痴、稚、恥。自分を基準にして人類を語るようなことを言って、ごめんなさい。この種のことについて観察できる人類が自分しかいないのです。

直線と四角だらけの四角い乗り物に乗って目の先だけは直線に見える四角くない世界という迷路をうろちょろする。直線と四角だらけの四角い建物の四角い部屋にいて直線と四角からなる世界を思考する。直線と四角からなり、四角い枠のある、窓、紙、ノート、書物、端末の画面から世界を見つめる。自分の中と外とが角と直線で重なるかに思える。

きっと直線も四角も抽象なのでしょう。四角の中にいて直線に沿って進みながら、または運ばれながら迷う。あなたも、私も.....。話が堂々めぐりになってきました。やはり、ここも（ここって、どこ？）角のある枠の中のようです。枠の中にいると思うことで安心して眠れる――ようやく眠れそうです。

言葉が降りてくる、言葉が湧いてくる、言葉をいただく

言葉が伸びてくる、言葉が伸びてくる、言葉を、ただ、

＊

書く時の必需品が、誰にもあるのではないでしょうか。文房具にこだわる人は多いですね。愛用している筆記具はいとおしいもので、他のものを使う気にはなれないと言う作家やライターさんの意見を見聞きします。

このペンだとよく文章が書けるとか、原稿用紙じゃないと人に見せる文章は書けないとか、パソコンでしか書けなくなっているとか、スマホで書くのが習慣化している、あと愛用と言うか、つねにそばに置いておく三角定規や文鎮やパワーストーンがある、なんて言う人も多いです。

いま挙げたのは物ですが、事や状況もありますね。

たとえば、書く前には散歩を欠かさない、シャワーを浴びてインスピレーション（霊感）を受けやすくする、音楽が聞こえないと書けない、逆に音がする環境では書けない、音楽はぜったいにロックそれも 60 年代のブリティッシュロック、わたしは何てったって演歌、ぼくはあのカフェのあのテーブルにつかないと駄目、愛猫がそばにいないと乗らない、なんて感じでしょうか。

こういうのはルーティーンと呼ばれていますが、分かる気がします。書くためにはある特殊な精神状態が必要であったり、脳のある部分が活性化されていないと書けない、というのはおおいにあると思います。それを誘い出す物や事や状況がある、それは個人差があり、人ぞれぞれだというわけです。

＊

ルーティーンには験を担ぐ側面もあり、おまじないのような行動として目に映る場合があります。もう現役から退かれましたが、五郎丸歩さんの例のチャーミングなポーズを見ていて、あの儀式を執り行わないと「何ものか」が助けてくれないのだろうなあと想像したことがありました。物だと、羽生結弦選手のプーさんがそうでしょうね。

スポーツ選手やアーティストは、自分しか頼る人がいない超孤独な極限状態に身を置くわけですから、文章を書く場合にも自分をあえてそうした厳しい状況下に置く覚悟があってもいい気がします。書くことは真剣勝負であり、書く行為は非日常的な場、あるいは特殊な精神状態のもとでおこなわれるのですから。

＊

言葉が降りてくるとか、言葉が降ってくるとか言う人がいますが、その気持ちも分かる気がします。天や空を意識した言い方ですね。言葉が出てくるとか、言葉が湧いてくるというのも、よく耳にします。自分の中に言葉が眠っているとか、住んでいるというイメージでしょうか。なかなか能動的で素敵な考えだと思います。

自分を超越した存在から言葉をいただく、あるいは自分の中にある言葉を出してやる。いずれの場合にも、何らかのきっかけが必要だという気がします。言葉を呼ぶサインや笛が必要になるのでしょうね。言葉を呼び出す、あるいは呼び込むきっかけやスイッチが要るわけです。言葉は魔法ですから。

え？　そんなに苦労しないよ。何となく書けてしまうもん。

そう言う人もいます。じっさいに会ったことがあります。たしかに、いつでもどこでも苦もなく、大学ノートを取り出して、その辺にあるペンですらすら文章を書く人がいました。人と雑談しながらでも手を休めないですから器用ですね。

その人はおもに詩と文芸評論を書いていて、書くことには苦労していないのに、女性問題でつねにトラブルをかかえていたのが、いま考えるとアンバランスで興味深い人物でした。いま流行の言葉で言うと「こじらせ」なんです。

その人はヘビースモーカーというかチェーンスモーカーだったのですが、ひょっとするとあの人の言葉を誘い出していたのは、煙草だったのかもしれません。

たしかに煙草がないと書けない人は多い気がします。そう言えば、バルザックはコーヒーをがぶがぶ飲みながら書いていたとか……。お酒はどうなんでしょうね。酔っ払っ

て書くのは不謹慎でしょうが、少しアルコールが入った状態で書く人は案外いそうですね。

＊

私はといえば、文章を書く前に好きな作家の本を見ます。読むのではなく見るのです。ぺらぺらめくりながら字面を楽しみ、ときにはあるページを開いたまま気に入っている文字や文字列をひたすらながめます。

そのうち、書く時がやって来ます。それまでは気長に文字の顔と文章の字面を見ています。言葉が降りてくる、言葉が湧いてくる、言葉をいただく。私の場合には、やって来るです。

「見る」に取り憑かれる

＊

人が好きなものに俯瞰があります。いまではドローンにカメラを載せて、かつて目にしたことのない空からの像を目にできるようになりました。俯瞰は英語では bird’s-eye view というそうですが、鳥瞰と同じ発想ですね。

いつだったか、牧羊犬が羊の群れを誘導する様子をドローンか何かで撮影したらしい動画を見たことがあります。羊たちも犬も上空から見るとほとんど点なのですが、その点の動きが美しいのです。

犬らしき点が動きまわり、羊たちらしい点の集まりが形を変えて、ある方向へと導かれていきます。犬の動きには無駄がないのです。上から見るとちょっと動いているだけで、羊たちを着実に囲いの中に誘いこんでいるように見えます。

こういうがまさに俯瞰とか鳥瞰ですが、犬にはそうした上から見た映像が見えているとは考えられません。それなのに、無駄なく正確に、人が望んでいる方向へと多数の羊たちを誘導するのですから、奇跡を見ている思いがしました。

＊

そのときに連想したのは、テレビで見るサッカーの試合の映像でした。サッカーの選手の動きは、複数のテレビカメラによって映像化されているわけです。遠方の高い位置から俯瞰的に撮影した映像もあれば、各選手の体の動きや顔の表情やその汗の流れさえ間近で見えているような接近した映像もあります。

ある選手に注目していると、敵と味方を含めた選手たちの位置と動き全体を、あたかも俯瞰しているような驚くべき動きを見せることがあります。上で述べた牧羊犬のように、フィールドの中の一点としてその位置からの視点で見ているはずなのに、まるで羊の群れ全体の位置と動きを把握しているかのような動きをするのです。

サッカーの試合のライブも臨場感があってわくわくしますが、試合中に複数のカメラで撮った映像を試合後に編集して見せる場合には、もっと驚くべき動きが紹介されることが多々あって、ぞくぞくします。

何であんな離れたところが見えているような動きをするのだろう。背中に目でもあるのだろうか。視界にあるものから視界にないものの動きを察知しているとしか思えない。さもなければあれは魔法だ、いや奇跡なのか。

＊

俯瞰という見え方は、何かをつかわないかぎり人にはできない「見る」であり「見える」です。鳥のように空から地上を見るなんて、大昔の人が空想して願った夢だった気がしますが、それがいまの人には可能になったのです。

人は俯瞰が好きです。何でも視覚化できるだけでなく、何でも俯瞰できると思いこんでいる節が見られます。地域地図、世界地図、航空写真、宇宙の画像。集合写真も、俯瞰の一種かもしれません。クラスの全員が映っていれば、全員を把握した気分になれるからです。

人は見えているようで、自分が想定しているほど「見えていない」。だから、もっと見えるようにと頑張る。とはいえ、いくら頑張っても人の知覚には限度があります。そこで何かの仕組み、つまり機材（道具）や器械や機械を発明して、それをつかってきたわけです。

もっともっと、まだまだ、という感じでしょうか。人は自分のつくったものを追いかけるようにして、さらに「もっともっと」をつくっていく。鏡や写真にうつった自分と追いかけっこをしているように見えてなりません。追いかけっこが強迫観念になっている気もします。

＊

鏡、影、落書き、絵画、写真、映画（影や幻影の進化したもの）、テレビ、動画、ゲー

ム、ＶＲ。これほど人が「見る」に取り憑かれているのは、いまだに十分に「見えていない」という意識があるからではないか。そんなふうに考えてしまいます。

いま私の頭にあるのは、やはりドローンによる撮影です。従来のヘリコプターによる撮影では危険すぎて絶対に目にできなかった「絵」が見えるようになりました。私は高い山々を映すテレビ番組が大好きです。食い入るようにして画面を見つめるのですが、とくに稜線や滝の上からの俯瞰には息を飲みます。その光景が夢に出てくることもあります。

ここにも、「見る」と「俯瞰」の魅力に取り憑かれた人間が一人います。

同じ形をした音を星のようにちりばめる

＊

Twinkle, twinkle, little star,
How I wonder what you are!
Up above the world so high,
Like a diamond in the sky.

よく口ずさむことがあります。語呂がいいですね。英語なのですが、口にしているときには、何語かなんて考えません。ただ音が快いだけ。

high、diamond、sky ——音とイメージにさそわれて、晴夜の清夜にきらきら輝くお星さまが目に浮かぶようです。その空から音が降ってくる気がしませんか。

Ah ! Vous dirais-je Maman
Ce qui cause mon tourment?

元歌らしいフランス民謡でも似た音が出てきます。

同じ音や似ている音がほどよく出てくると、聞いていても、唱えても、目にしても、読んでも気持よく感じることがあります。

似ているものや同じものには人の気持ちをなごやかにする働きがあるようです。

反復や連続や変奏の心地よさは、視覚的なものでも見られますね。模様やパターンなどの広義のデザインがそうでしょう。

＊

日本語で簡単な例を見てみましょう。

セブン
イレブン
いいきぶん

口調がいいですね。脚韻でしょうか。耳にすっと入りすっと馴染む。魔法のように、お客様がどんどんお店に入るわけです。イッツ・マジック。

スカッと
さわやか
コカコーラ

耳に快いですね。頭韻でしょうか。じつに爽やか。魔法のように清涼飲料水が売れるわけです。イッツ・ア・ミラクル。

両方とも、もとが外資系の会社のＣＭソングですね。さもありなん。

欧米の定型詩の韻はもっと複雑でややこしいみたいですけど、歌詞やキャッチフレーズやコピーなどでの韻は簡単に考えていいと思います。要するに、似た発音（母音も子音もです）の言葉がいい具合に散らばっているのです。

この「いい具合に」がポイントです。いい具合に散らばっていると快く耳に響くわけです。同じ形をした音を星のようにちりばめるとも言えそうです。

＊

ガラスと言えば、透明。
カラスと言えば、黒。

マリア・カラスと言えば、男性で苦労。
カラスは英語で crow。

自作の戯言なのですが、韻の練習をしてみました。頭韻と脚韻です。

＊

うさぎおいしかのやま（yama）

こぶなつりしかのかわ（kawa）

この出だしにも同音というか韻を感じますね。西洋の定型詩でも日本の定型詩も、音の一致や類似で掛ける（掛け詞）以外に、音数とか文字数が大切なようです。

口にするとうっとりします。

山川草木、日本の原風景が重なります。

＊

英語の楽曲で出だしの語呂がいい歌詞といえば、アース・ウィンド・アンド・ファイアー（Earth, Wind & Fire）の September ではないでしょうか。なぜか、九月になるとラジオやお店でよくかかる曲です。

Do you remember the 21th night of Septermber

八語からなるフレーズですが、ここに口調のいい二つの似た音の単語がちりばめてあります。すごいインパクトを感じる歌詞です。この部分のメロディーはささやくような抑えた感じで、かえって効果を高めている気がします。

Now December found the love that we shared in September

このフレーズも見事ですね。時間差という差異に、同音という類似を重ねているわけです。この箇所で、十二月に九月のあの夜を思いだしている歌だとはっきり分かります。

「覚えているかい？」で始まる歌ですから、回想だとは分かるわけですけど。

＊

音の美しさは何にも勝ります。音が模様や風景を呼ぶことがありますね。音が先だと最近よく思います。意味や文字は後付けなのです。

人は目をつむって寝ます。目を閉じて亡くなります。そこにあるのは音の記憶と記憶の風景ではないでしょうか。そこでは意味も文字もないだろうと想像しています。

言葉こそが最強の嗜好品であり、最強の薬物かもしれない

言葉こそが最強の資産です。最強の業務かもしれない、

＊

嗜好品という言葉を辞書で引いたり、ネット検索すると、けっこうすごい説明というか、わくわくするような記述があります。コーヒーや煙草やお酒やお茶だけでなく、清涼飲料水やお菓子まで含める解説があってはっとしました。

これまで人間が嗜好品にどんなに依存し、それを入手するためにどれだけ奔走したか、さらには数えきれないほどの争いを起こしてきたことも知りました。

嗜好品に加えて香辛料までに話を広げると、歴史、地理、経済、政治までかかわってくる大きなテーマになりそうです。まるでジャレド・ダイアモンド著の『銃・病原菌・鉄』みたいなスケールで、人類が論じられそうです。もう誰かがそんな本を書いていそうですね。

コーヒー、煙草、お酒、お茶、お菓子といったものが、文章を書くときの必需品だという人は多いです。考えてみてください。言葉を書くということは無から有を生む魔法なんです。言葉を誘いだすためにもちいる嗜好品は、魔法が起きるのをうながし助けてくれるブースターだといえるかもしれません。

＊

嗜好品で気をつけなければならないのは嗜癖です。摂りすぎると依存してしまうリスクがあります。

思うのですが、人にとって言葉こそが最強の嗜好品ではないでしょうか？　人は言葉なしに生きられません。言葉を求めて、人は聞き、読み、書きます。現実はままならないものですが、現実の代わりに言葉をつかえば、現実をいじったり、思うままに操れるような気分になれます。

言葉を聞いたり読んだり書いていると、現実界を忘れることができます。現実界に似た言葉の世界での疑似体験も可能です。小説にかぎりません。テレビドラマや映画でも言葉のやり取りがフィクションとして出てきますが、言葉は疑似世界に不可欠なパーツなのです。

現実のようで現実ではない。でも現実のような感情や気分や快感を得ることができる。だから人は言葉にはまるのです。鬱憤を晴らすこともできるでしょう。ストレス解消にもなります。その意味ではお酒に似ています。言葉でいい気分になっているときには何らかの脳内物質が分泌されているのは間違いないでしょう。

＊

自然界では絶対に得られない言葉という「嗜好品」を呼び出すために、自然界で採集した物質からなる嗜好品をもちいるのですから、人はややこしい生き物ですね。

言葉なしでは生きられない、つまり言葉に依存し嗜癖している人にとって、言葉は神なのです。物神であるばかりか、事神であり言神だとも言えそうです。なにしろ、言葉は人にとって魔法なのですから。

嗜好品のことを考えていて、すごいことが頭に浮かびました。勘の鋭い人はぴんときたことでしょう。そうです。あれです。あれに話が飛ぶのは必然ではないでしょうか。

薬のことです。クスリと表記すべきでしょうか。麻薬をはじめとする薬物の助けを借りて執筆されたらしい文学作品はたくさんありますね。真偽のほどはよく分からないのですが、そうだと言われている作品があります。

＊

学生時代にオルダス・ハクスレー著『知覚の扉』という本が流行っていました。私も持っていましたが、ぺらぺらめくっただけで辟易しました。私には合わないみたいです。そういえば、トマス・ド・クインシーの『阿片常用者の告白』の新訳が出たのですね。しかも野島秀勝氏の訳ですから信用できると思います。

薬関係での創作だと、ウィリアム・S・バロウズとフィリップ・K・ディックがいましたね。フィリップ・K・ディックは一時期よく読んだのですが、いまでは興味はありません。もう読むパワーがないという感じです。

やっぱり、人にとって言葉こそが最強の麻薬であり魔薬なのかもしれません。自然界では得られない、あるいは自分では製造も精製もできない（言葉は外からやって来る「外」なのです）、言葉という「麻薬・魔薬」を呼び出すために嗜好品や麻薬・魔薬をもちいるのですから、人がめちゃくちゃややこしい生き物であることは確かなようです。

数学の修辞学

＊

寝入り際に宇宙の果てについて考えることがありませんか？　どうなっているのだろう。あるところでぷかぷか浮かんでいる自分を想像します。その一メートル先が宇宙の限界だったとしたら？

興奮して眠られなくなることもあります。無限、限りがない、果て、といったイメージを、子どものころからあれこれ想像し、わくわくしたり、びびったり、考えあぐんで眠くなったことが何度もありました。

不思議でならなかったり、気になって仕方がないことが、急に頭に浮かんで目が冴えてしまうことがあります。ややこしいことだから、なるべくかかわらないようにしているのに、とうとつに出てくるのです。

で、「その一メートル先が宇宙の限界だったとしたら？」ですが、その先は「ない」のだとしたら、それは人にとっての「ない」という言葉と、「ない」についてのイメージで、「ない」と決めるしかないという気がします。

つまり、あくまでも言葉とイメージ（レトリックでも詩学でもいいです）の問題ではないでしょうか。その先は人でなくならないと、とらえられないかもしません。

人でなくならないと、とらえられないなんて、いま、しれっと書きましたが、人の外、人外に出るなどと言っても、それもまた言葉とイメージをもちいて騙る（語るではなく）行為でしかないのでしょうね。

まさに果てを目の前にした気分。気づいていないだけで、果てはどこにでも転がっている気がしてきました。世界は果てだらけ、宇宙は果てだらけ。

＊

数学の微分で、方程式をグラフに描くと曲線になって、その曲線の微小な部分を拡大すると直線に見えるというような話があったように記憶しています。理屈というのには、あまりにも適当でいい加減に感じられて、一種の面白いお話として受けとめてきました。

数学に対して、自分が勝手にいだいているイメージを裏切るほどのテキトーぶりなのです。数学って、こんなに感覚的なものでしたっけ。もっと冷徹かつ緻密で、感覚などという曖昧なものを排除したガチガチの論理で成りたっているものだと勝手にイメージしていました。

いまＰＣに向かって文章を書きながら、あたりを見回すと、あちこちに曲線が見えます。目の前にもありました。ＰＣのモニターに映し出されている活字は直線と曲線から成りたっています。また、ＰＣの脇に家のカギが置いてあるのですが、それには細い紐と鈴がついています。

紐は細い糸を編んだもののようです。その紐が曲線を描いています。虫眼鏡でその紐の曲線部分を拡大してみると、確かに直線に見えます。ここで、大切なのは、「見える」です。

微分では、方程式をグラフにした場合の曲線を拡大すると「直線になる」とは言っていなかった気がします。あくまでも「直線に見える」だったと記憶しています。

「見える」なんて、すごくテキトーじゃありませんか。それとも、そんなことはないのでしょうか。この種の疑問を質問できる相手がいないので、どうなのかは分かりません。

＊

連想が働いたらしく、いま思い出しましたが「限りなく０に近づける」というフレーズも頭に残っています。前後関係は忘れました。数学の授業でよく耳にしたり、目にしたフレーズです。

微分だけではなく、数学の違った分野でも見聞きした気がします。物理の授業でのこ

とだったという気もします。

　数学も物理も、両方とも苦しくて退屈な授業だったので、混同しているのかもしれません。ですから、記憶違いである可能性は高いです。いずれにせよ、もしも数学にそういう言い回しがあるとするなら、これまた感覚的な気がします。

「限りなく」ですよ。詩や宗教や哲学や広告のコピーみたいじゃありませんか。限りなく透明に近いイエローでホワイトでちょいとブルースみたい。

＊

　また思いだしました。「無限大」って言葉がありました。「∞」なんて立派な記号まであったのも思いだしました（「8」を連想しアラン・ロブ＝グリエまで頭に浮かんできます）。ということは「無限小」ってのもあるのかしらん。

　これはどう考えても、やっぱり、印象の世界というか感覚的なようです。漠然と考えていたことを、こうやって文章にしてみると、ますます、そうした思いが強くなりました。

　そういえば、数学は詩であるなんて何かで読んだ気もしてきました。それとも数学は宗教である、数学は言葉である、数学は哲学である、だったかしら。

　いずれにせよ、そうであれば、感覚的であってもいっこうに不思議はないわけですけど。そうでないものを数学に期待していた、このアホがアホであったと分かっただけでも、きょうの収穫と考えましょうか。

＊

　で、思ったのですが、数学はレトリックである、つまり言葉の綾であるなんて言えそうじゃありませんか？　なにしろ、数字や言葉や記号や数式（そういえば数式が美しいというレトリックを聞いた覚えがあります）やグラフをもちいています。

　要するに「「何か」の代わりに、その「何か」ではないもので済まして澄ましている」

という置き換え（すり替えでもいいです）の仕組み、つまり比喩（比喩です）の体系なのです。

まさに隔靴掻痒かっかそうような（ブーツの上から足の痒いところを掻いているようなもどかしい）遠隔操作（遠くにあって手が届かないものの代わりにその辺にあるものをつかう、つまりとっても柄の長い孫の手で遠いところにあるものを突いたり動かしたりする）です。

でも、数学はレトリックだなんていうと数学にケチをつけている気配が濃厚なので、数学は修辞学であるはどうでしょう（ガストン・バシュラールみたいに詩学（la poétique）も捨てがたいです）。「数学という名の修辞学」とか「数学の修辞学」なんてかっこよくないですか？

いずれにせよ、修辞学という言葉は、数学という厳めしい字面とイメージに「限りなく」ぴったりに「見えて」きました。論理ではなく印象の問題なのです。

あなどれない話

＊

言葉は、うんちにきわめてよく似ている――。

いったん出たうんちは、この惑星においては、何かに帰していきます。分子、原子レベルで循環するそうです。いった出た音（おん）である言葉は、それを発した人自身の内部で、あるいは、その人と他の人たちとの間で、またその人と何らかのもの・こと・現象との間で影響を及ぼし合います。

言葉とうんちはともに、体にある穴から出てくる――。

この「出てくる」、つまり「出る」という言葉が気になって仕方ないのです。なぜなのか？　おそらく幼児体験と関係があるように思われます。幼児体験ですから、よくは覚えていません。

でも、かねてより、人間は一人であっても複数形であるとか、多面的な存在であるとか、つねに揺れ動いている流動的な状態にあるなどと考えてきました。

そうした考えからすると、大人や子どもや幼児は別個の存在ではなく、連続しているというふうに感じられるのです。自分の場合で申しますと、「あな」とか「でる」という言葉やイメージを頭に浮かべると、懐かしく切ない思いがよみがえってきます。ちょっと、エロチックなわくわく感も覚えます。

＊

小さな子どもは、「あな」とか「でる」という言葉や、そうした現象に対してすごく興味と愛着を示します。周りに幼児や小さな子どもさんがいて、毎日、あるいは日ごろよく接する機会のある方なら、体験的にご存知ではないかと思います。

たとえば、座布団でドーナッツみたいに真ん中が開いたものがありますね。幼い子どもさんに見せてやってください。必ず、その穴に興味を示し、手を突っ込んだり、中を覗いて向こう側を見たりしますよ。うれしそうに、または真剣な顔をしてそんな行動をします。

また、練り歯磨きのチューブや、中身の入ったマヨネーズの容器なんかを、チューっと絞って見せたとします。当然、にゅーとか、にゅるにゅるという感じで中身が出て来ますね。その様子を見た時の子どもさんの顔をよく見てください。これまた、うれしそうな、あるいは真剣な表情になります。

中には、きゃっきゃっと言って、喜ぶお子さんもいるにちがいありません。あなは、あなどれないです。人間の原点かもしれません。マジにそう思います。

＊

ここで、「うんち＝何ものか」と、人間の出発点である赤ちゃんとの「であい＝出会い」について、考えてみましょう。

生後あまり経過していない赤ちゃんが、なるべく固形に近いうんちをほぼ初めて、しかも裸で排泄した場合を想定しています。たぶん、「あれっ？」って感じで、「見る＝知覚する」のではないでしょうか？

赤ちゃんにとって、「うんち＝何ものか」は、たとえ「うん」と息んだにしろ漏れたにしろ、「出た（＝あれっ！？）」と「出した（＝やっぱり！）」の中間というよりも、むしろ、その両者の連続した意識のうちでは、「出した（＝やっぱり！）」寄りにある出来事である、という気がします。

言い換えると、「うんち＝何ものか」を「出した自分」を意識することは「自分」を意識すると同時に、「他者＝世界」の存在を意識することにより、両者が異なると意識することでもある、となります。

具体的に言うと次のようになります。「うんち＝何ものか」が出た。でも、うんちは自分が出したみたいだ。自分の体から離れてここにあるうんちは自分の一部でもあり、も

う自分とは関係のないものでもある。とにかく、自分から「隔てて＝離れて」、そこにある。存在する。重要な点は、「自分から『隔てて＝離れて』」です。

この距離化はフィクションや演技の芽生えとも言えそうです。

＊

もう少し厳密に言います。

「出した（＝やっぱり！）」を、あえて「出た（＝あれっ！？）」へと「引き戻す＝逆戻りする」意識の働きもあります。

つまり、自分のした行為の責任を「周りの世界＝他者」に転嫁することにより、まるでそれが自然発生的な現象であるかのように装う、あるいは、故意にそうだと思い込むことにより、その現象との距離感を演出しようとする場合があるのです。

簡単に言うと、「これ、わたし（ぼく）のうんちじゃない」です。

なぜ、そのような距離感の演出をするのかというと、うんちが自分から「離れる＝分離される」、あるいは「分離する＝周りの世界の一部になる」さまを「見る＝知覚する」からです。大切なのは、これは演出であって断定ではないという点です。簡単に言うと、「これ、わたし（ぼく）のうんちじゃないということにしておこう」です。

ここでも、距離の捏造ねつぞう＝虚構化、装う、振りをする、演技をするという身振りが見えます。

＊

ところで、みなさんはご自分のうんちが出てくるところを見たことがありますか？
肉眼でですよ。鏡をつかっては駄目です。鏡の存在をおそらく知らない赤ちゃんに悪いです。抜け駆けはＮＧです。ましてスマホのカメラなんて言語道断です。

では、ご自分の言葉が出てくるところを肉眼で見たことがありますか？　ふつう文字が読めない赤ちゃんに抜け駆けはいけないので、話し言葉に限定します。というか、そ

もそも人はふつう自分の顔を肉眼で目にすることができませんから、言葉が口から出てくるところも見たことはないと考えられます。

言葉は、うんちにきわめてよく似ている――。
言葉とうんちはともに、体にある穴から出てくる――。

似ていますね。激似ではないでしょうか。あなどれない話です。

あな、どれ？　ない！

この事態は赤ちゃんにとって衝撃なのです。下手をすると、つまり、まともに受けとめると、自分が壊れてしまいます。そこで、「自分のじゃない」という距離化＝虚構化をするのです。同時に「自分のじゃない」振りをするのです。演技の芽生えですね。もちろん無意識に、です。人間はうまくできていますね。

そんなわけで、赤ちゃんは少し大きくなると、お医者さんごっこに熱中するのです。自分のが見えないから、他者でその存在を確認しようとするというわけです。あな、どれ？　ほー！　感心し安心するのだと思います。

そこのあなた、他人事ではありませんよ。大人はそうした状況を卒業していないのです。

大人や子どもや幼児は別個の存在ではなく連続している――。

いまだに、ご自身の口も肛門も肉眼で見たことがありませんよね。あな、どれ、ない状態は継続しているのです。だから、大人は――大人でなくてもいいのですけど――他者を相手にその存在を確認しながらちょめちょめするのが好きなのです。安心するのだと思われます。

人は自分が見えないという最大の恐怖と不安を隠蔽する必要があるのです。そのためにもちいる仕組み（からくり）が言葉であるという気がします。

以上は、ジークムント・フロイト系ジャック・ラカン寄りの戯言です。

あなどれない話でした。

晴れて自分と対面するとき

＊

鏡は自分の姿を見るためにあると思われますが、鏡に映っているのは自分でしょうか？

鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。正確にいえば、時間ではなく、ずれなのかもしれません。抽象である時間を、人は「見る」ことができません。「まえ」と「いま」とのずれとして感知するしかないのです。

ずれは印象ですから、計測も検証もできません。その意味で、ずれは「似ている」に似ています。ずれは鏡に映っているから「似ている」に似ているわけではありません。鏡は「似ていない」も映しますし、映りもします。

＊

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこです。先を越されないように必死で見ていなければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできません。ですから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もないといえます。

お化粧をするときには、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかないのです。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になります。

＊

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものです。恥ずかしくてまともに見られません。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。でも幸いなことに、顔そのものは見ないだけの体感的な知恵が、人にはそなわっているようです。というか、じつは顔そのもなんて見えないみたいです。

ずればかりがやたら目につくという意味です。そんなわけで、顔や姿は目に入らないというべきかもしれません。写真に写っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるともいえるでしょう。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかしいと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのです。

免許証とか証明書の写真を思いうかべてください。恥ずかしさと屈辱だけが映っています。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないでしょうか。恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができているということです。

＊

昔の写真とか子どものころの写真になると、ずれをもろに受け入れる余裕ができていますから、見ていてもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもありません。むしろ、懐かしくて見入ることがある。もはや、他人となった自分です。

まあ、かわいい。この子、誰？　天使を見る人もいますね。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ているのです。似ているけど、自分ではない誰か。でも、ようやく自分を目にすることが可能になります。

晴れて自分にご対面というわけです。初めまして。Nice to meet you.

ただし、かなり昔、それも子どものころの自分の写真ですから、その晴れて目にした自分はもはや他人と同じでしょう。それが自分と同一人物だと見なすのは「実感」でも「体感」でもなく、むしろそうだと言われて分かるという意味での「知識」であり「情報」ではないでしょうか。

一方で、鏡に映ったいまの自分の顔が見えないという事態はいぜんとして続いています。鏡を覗きこんで目にしているのは、「まえ」と「いま」とのずれなのです。

ぜんぶ「うつる」と読んでください

＊

初めて目にする影、初めて見る鏡、初めて覗くカメラのファインダー、初めて見る写真――。思いつくままに並べたフレーズですが、どれもが「うつる」と関係あります。影に映る、鏡に映る、ファインダー越しの眼に映る、写真に写る。

こうした行為や身振りを個人レベルで初めて体験するさまを想像するとわくわくどころか、ぞくぞくしてきませんか？　自分の記憶の中の、そうした場面を思いだしてみてください。と言われても、なかなか覚えていませんよね。

＊

人類のレベルで空想してみましょう。

初めて目にする影、初めて見る鏡、初めて覗くカメラのファインダー、初めて見る写真。影に映る、鏡に映る、ファインダー越しの眼に映る、写真に写る。

こうした身振りや行為を人類というレベルで初めて体験したさまを想像すると、これまた気が遠くなりそうです。不思議だったでしょうね。たまげたにちがいありません。

初めての鏡なんて、雨のあとの水たまりとか川とか湖の水面だったのではないでしょうか。水面に映った自分の姿を覗きこんだナルキッソスの話を思いだします。エーコー（エコー）の話もありましたね。こだまは、木霊、木魂、谺ですが、これも音声が遠くへとうつるわけです。

「うつる」には距離がともないます。その距離は空間的であったり時間的なものでしょう。そう考えると「うつる」は、「つたわる」「つたえる」に近そうですね。

＊

「うつる」の漢字をまじえた表記には自信がありません。辞書や用字辞典で確かめながら書きますが、例文が同じだったりして、自分の書きたい文でどちらをつかったらいいのか、迷うことがよくあります。とくに「映る」と「写る」は迷います。

「にやけた顔で写っている」「裏のページの絵が写って読みにくい」「鏡に映った顔」「障子に映る人影」なんて複数の辞書やネット辞書でも見かける例です。孫引きというやつですね。辞書の例文や語義は、伝染んです。

きょとんとなさっている、お若いあなた、「うつるんです」と読んでください。とってもシュールで味わいのある漫画です。

うつる、写る、映る、移る、遷る、伝染る、流行る、孫引る、引用る、模倣る、写本る、写経る、印刷る、翻訳る、映画る、写真る、複製る、放送る、網路る、偽造る、剽窃る、盗作る、広告る、宣伝る、布教る、革命る――。こうしたものは、ぜんぶ、うつるんです。ですから、ぜんぶ「うつる」と読んでください。よくご覧ください。人類の歴史そのものでもあります。

＊

初めて写す、初めて写る、初めて映す、初めて映る、初めて移す、初めて移る――。いま挙げたフレーズですが、英語に翻訳することができるでしょうか。その多義性のニュアンスや語感まで置き換えることが可能かという意味です。

文字どおり訳す（やけっぱちでしょう）、訳文に註を付けて説明する、説明を訳した文章に織りこむ、といった方法が考えられます。いずれにしても語感まで「うつす」のは至難の業です。そんなの、できっこありませんって。

言葉をうつすことは難しいです。思いをうつすことも難しいです。現実界において物理的にうつすのも不可能だらけにちがいありません。でも、そうやって人類はここまで来たのです。写本と印刷術と翻訳と学習にどれだけ負っているか（そして妄想と空想と錯覚と思いこみにも、です）。

何がって文明とか文化のことです――。うつるんです。人類のいとなみの底には、この身振りがあるようです。

人のつくるものは人に似ている

＊

人のつくるものは人に似ているとよく言われますが、たしかに人に似せてつくっているとしか思えないものがあります。

器、スプーン、箸、椅子、寝台、座布団。手袋、シャツ、ズボン、靴下、ストッキング、衣服。

丸みを帯びたやかんの注ぎ口を見ていて、どきりとすることがありませんか？　どことは言いませんが、人体のどこかに似ているんです。私なんか、ソファに体を沈めると懐かしさで涙ぐむことがあります。誰かを思いだしているのでしょうね。ソファは人に似ています。

＊

人のつくるものは人に似ていると実感できるのは、何といっても、ホームセンターや電気製品の量販店です。店内に入ると、たちまち人に似ているものに囲まれます。

お茶わん、湯飲み、箸、スプーン、フォークといった「食」に関係のある物たち。椅子、テーブル、机、布団、ベッド、枕などの広義の「住」関連の物たち。そして、シャツ、上着、ズボン、スカート、下着、手袋、帽子といった「衣」に関する物たち。

こうした物たちを観察すると人に似ているなあと感動してしまいます。

なかでも、手袋なんて、手と激似です。湯飲みなんて、開いた口です。開いた口がふさがりません。椅子やソファやベッドを見ていると、四つん這いになった人に見えます。こうやってこじつけているうちに既視感を覚えて、何だろうと思ったのですが、被害妄想にそっくりな心もちがします。

そう考えるとそういうふうに見えてくるところが、似ているのです。

似ているは、比喩と同じで、似ているから出発するだけでなく、似ているという暗示から生まれることも大いにある気がします。「似ている」は知覚からだけではなく、想像からも生まれるとも言えるでしょう。

「似ている」は増える。エスカレートするのです。

＊

似たような話ばかりしてごめんなさい。やっぱり似てくるんです。テーマに文章が似てくる、つまり擬態することはよくあります。しかも、「似ている」は増えます。いまそんなふうに書いていますが、実感していただいていますか？

シンクロですか？　そんな洒落た言い方は私には似合いません。同期ですか？　それをつかうと賢そうに聞こえますけど、私は「似ている」が「増える」でじゅうぶんです。

＊

器類は、水をすくう時の片手あるいは両手の形に似ています。口をつける湯飲みやグラスには、口があります。やかんや急須の注ぎ口と管の部分は、人の食道の延長に見えてきます。

そもそも人の体は管だというレトリックを見聞きします。単純化すると、口から飲み食いした物が肛門や尿道から出て行くという消化器系を重視した比喩になりますね。食道、胃、腸という流れがあり、流れる場が管というイメージです。

循環器系だと液体が流れる血管やリンパ管があり、呼吸器系だと鼻から始まって気管と気管支という流れになるようです。気体が流れる管というイメージでしょうか。ストローやホースや笛みたい。

箸やフォークは指に似ています。椅子には背も足＝脚もあります。ふっくらとした座布団の感触は、どこかお尻に似ています。衣類は、体に当てるわけですから、とうぜん、その当てる部分にそっくりにつくられています。

＊

さらに、こじつけをするなら、自動車なんて正面から見ると、顔に見えてしかたがない方、いらっしゃいませんか？　これこそまさに「人工の人面〇〇」です。人面魚や人面岩を見て、うわーっと驚くだけではなく、自分でつくった物を見て、うわーっとびっくりするわけですから滑稽な感じもします。

機関車や電車と言った乗り物も、そうですね。正面から見ると、表情をそなえた顔に見えます。あの不気味にも見えないこともないトーマス君なんて、とても分かりやすいイメージです。

テレビもそうですね。というか、そうでしたね。テレビ時代の初期には、受像機の上部にウサギちゃんのお耳みたいなアンテナが付いていたのをテレビで見たことがあります。

あと、こじつけると、銃なんて男性器に似てませんか？　水鉄砲はもちろんのこと。ロケットもそうかな。

その他に、人や人の身体のある部分に似たものを挙げるなら、口を開けたポスト、長針と短針が表情を刻々と変えるアナログ時計、先端に毛のついた歯ブラシ、鉛筆やペン（どういうこっちゃ）、チューブ入りのケチャップやマヨネーズ（ぐにゅっと出てくるさまを思い浮かべてください）、ケータイ、ゲーム機のコントローラー、ガラス張りのパチンコ台.....。こじつけが、だんだん苦しくなってきましたね。

被害妄想と同じで、あれもこれもと人や人の一部と似ているものを感じるのは、つらいものがあります。そうやって見なければならないような義務感を覚えるようになるのです。誰に頼まれたわけでもないのに、です。

まるで擬人化地獄ですが、このオブセッションを克服するには、人でなしになるか人外境に逃れるしかないのかもしれません。

人のつくるものに人が似ていく

＊

荒唐無稽な夢。荒唐無稽な想像。根拠のない空想。

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。冷蔵庫をつくったために、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。パソコンをつくったために、パソコンの従者や下僕になった。スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わせて生活するようになった。

それだけではない。

大量生産されたそっくりなものを使う人間は、地球のあちこちで同じ仕草同じ動作をするようになる。そっくりがそっくりを生む。そっくりをそっくりが真似る。シンクロ、同期、似ている、激似、酷似、そっくり、同じ。

＊

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。うつったものに似せる、うつったものに似てくる。ミメーシス、模倣、描写。

うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

＊

もしもの話。戯れ言。

言語を習得させ、海を見せて、海を描写するように指示する。海についてのパーツである、波、浜、砂浜、沖、岩、砂、石、水、海水、大波、小波、しけ、なぎ、太陽、夕陽、朝日、雨、風、カモメ、魚、貝、流氷.....といった言葉を覚えさせた上で。器用な人なら作文を書くだろう。お手本なしで。

絵の具と筆と鉛筆と紙を与えて、海を見せて、海を描くように指示する。器用な人なら描き始めるだろう。お手本なしで。

果たしてそんなに単純な話なのか。天才なら、書けるし描ける。そんな適当な話なのか。

＊

戯れ言のつづき。

お手本を見せたとする。さらには筆記具の使い方と書き方、画材の使い方と描き方を教える。大切なことは、たくさんのお手本、つまり文章や作品を読ませ、たくさんの絵を見せること。真似させること。たぶん、真似ることで、めきめき作文力がつき、絵の才能が伸びるのではないか。

＊

言葉も絵も外から来るもの。借り物。だからこそ、真似る対象になり、真似ることで熟達する。もちろん才能もあるだろう。大切なのは、真似ること。まねる、まねぶ、まなぶ。

独創ではなく、引用と模倣と反復と変奏が芸術の実相ではないか。それにしてもオリジナリティ神話は強い。信仰ではないか。ないもの力は強い。ないからこそ強く信じる。

人が物語を真似る

＊

荒唐無稽な想像。荒唐無稽な夢。

人が物語を真似る、物語に似せる、物語に似る、物語に成りきる、物語に成る。

人が書物を真似る、書物に似せる、書物に似る、書物に成りきる、書物に成る。

人が演劇を真似る、演劇に似せる、演劇に似る、演劇に成りきる、演劇に成る。

＊

写字、写経、写本、書写、筆写。書、書道、カリグラフィー。

書物や文字を写す職業。筆耕、写字生、写経生、スクライブ。

＊

言葉と言葉によってつくられている知の総体を信じ、その身振りを模倣し、言葉と知になりきろうとした二人の写す人（写字生・筆耕）についてのお話。

フロベール作「ブヴァールとペキュシェ」。

これほど表象に対しての深い洞察に満ちた私は小説を知らない。

＊

ボルヘス作「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」なんてややこしい小説まであるらしい。あらすじは読んだことがあるが、作品を読んだことはない。これから読むこともないだろう。

死ぬほど退屈するに決まっている。退屈な作品を書き写して退屈して死ぬのはごめんだ。まだお経を写すほうがましかもしれない。

真似てつくったものを真似る

＊

荒唐無稽で根拠なしの空想。馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

＊

物語を模倣する人間についての小説。『ドン・キホーテ』。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。まさか、小説を壊しているのではないか。できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

＊

物語と小説をまねて、まがい、まげた作品を、さらにまねて、まがい、まげた作品。『トリストラム・シャンディ』。

この作品をまねる、あるいは無意識にまねることとなる来たるべき作品たち。まがい、まがるしかないのが小説というジャンルの運命であるかのように。似せるもの、似せもの、偽物。

とはいえ、読み物でもある。読み物は読み物を模倣して、書き継がれる。

＊

小説を模倣する人間についての小説。小説と現実を混同してしまう人間についての小説。『ボヴァリー夫人』。

小説というジャンルの始まりと洗練。律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

小説を模倣するボヴァリーを人は笑えるだろか。映画を、テレビドラマを、ＣＭを、アニメを、（演じる）俳優を、ストーリーを、ドラマを、キャラクターを、出来事を、事件を、報道を、ディスプレーに映った像やテキストを真似て、引用し、似せて、なりきる私たちは、そっくりな身振りをしていないだろうか。

ボバリズムとは、私たちのことではないか。

フロベールが「ボヴァリー夫人は私だ」と言ったという神話があるが、そう口にすべきなのは、私たち一人ひとりではないのか。ボヴァリー夫人は私たちなのだ。

＊

恋に恋する人間。物語にかたられてしまう人間。小説の登場人物と自分を同一視する人間。

小説や物語を、映画や演劇やテレビドラマやゲームに置き換えても事情はそれほど変わらないのではないか。あるいは、歴史や神話や信仰や哲学や生き方に置き換えても事態はそれほど変わらないのではないか。

仮に、政治や社会現象を、世界や国家や地域を舞台とした、物語や劇としてとらえるとすれば、これまた事情も事態も同じなのではないだろうか。

＊

登場人物と読者、演じる者と観客、舞台に立つ者とそれを眺める一般人。

人は観客や読者であることを忘れて自分が主人公だと思い込む。そうした観劇の仕方や読み方を否定するのではない。そもそも否定できるたぐいの問題ではない。

どんな子どもでも、読み聞かされた話に自分を重ねる。それがフィクションというものの仕組み。

観るとは、聞くとは、読むとは、そういうことなのだろう。そうした事態に自覚的であるかどうかは、趣味や気質や、その時の気分の問題なのかもしれない。

＊

荒唐無稽で根拠なしの空想。馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

うつったものに似せる、うつったものに似てくる

＊

＊うつったものに似せる、うつったものに似てくる

鏡を見る。鏡に見入るのは、誰でも毎日やっていそうなこと。そこに映っているのは自分だと疑わない。人前に出て恥ずかしくない顔と格好をしているか確かめる。お化粧をする。身だしなみを整える。

それだけなのか？　本当に、そんなふうに単純なものなのだろか？　世の中には、変なことを考える人がいる。変なことを書く人がいる。小説にまで書く人がいる。変だから書くのか。変だから小説なんて書くのだろうか？　人が小説に似る。小説が人に似る。

＊

かがみ、鏡、かんがみる、鑑みる。見入る、魅入る、見入られる、魅入られる。うつる、映る、移る、入る

鏡の中に入る。そんな小説がある。『鏡の国のアリス』。

鏡の中に入る前に言葉という鏡に魅入る。言葉はかがみ、屈み、鏡、鑑。

かがみ、しなり、おれる。屈折、reflection、inflection。

写真術のパイオニアだったルイス・キャロル。数学者・論理学者でもあったルイス・キャロル。その符合と屈折ぶりはただ事ではない。

＊向こうへと落ちていく

水面に映った自分の姿を見る。鏡を見る。かがみ、かがむ、うつる、映る、写る、移る。

おちる、落ちる。墜ちる、堕ちる。

鏡像。姿。反射。自分のようで自分ではない。自分そっくり。自分に似ている。自分ではない。自分とちがう。

こっち、むこう。ここ、あっち。ここ、かなた・あなた・彼方・貴方。

水面、鏡の恐ろしさ。死へといざなう鏡、水面。おちる、落ちる、堕ちる、墜ちる。

落ちていく、向こうへと落ちていく、かなたへと落ちていく。

声がうつる、映る、写る、移る、遷る。響く、こだま、木霊、谺、エコー、空気の振動、音、音響、波。

録音、レコード、蓄音機、拡声器、マイクロホン、スピーカー、再生、再現、再演、反復、模倣。

ナルキッソス、エーコー、木霊、『ドリアン・グレイの肖像』。

＊似る、似せる、成りかわる

似た小説や映画には事欠かない。ある小説を読んでいて、あるいは映画を観ていて、あれっというふうに既視感を覚えることは多い。前にも読んだことがあるような話、見たことがあるような身振りや行動、聞いたことのあるような科白、聞いた記憶のあるメロディー。

他人の家に入る。その家にある服を着る。物を食べる。座る、歩く、その辺にある本を読む、トイレに入る。その時、入った人は、その家の主を真似ることになる。

似た話、似た光景、そっくり、デジャビュの洪水。軽い目まいすら覚える。

＊

似ている、似せる、似る、成りかわる、成る。

誰かに似ている。その誰かに似せるように努力し、その結果似る。それだけでは済まない。その人物に成りかわるのだ。そしてついにその人に成る。お察しの通り、これはサスペンスであり犯罪小説。怖い話。

そんな小説がある。小説とは異なる部分もあるが映画にもなっている。パトリシア・ハイスミス作の『太陽がいっぱい』。

この小説にはそっくりな邦訳（翻訳だから似て当然）が二種類あり、映画化された作品も二種類ある。「似ている」や「そっくり」や「既視感」を楽しみたい人――そんな人がいるのか？　ここにいるけど――には堪らない話。

続編に『贋作』や『リプリーをまねた少年』がある。これまた目まいのするような話。目まいのする読書の好きな方にお薦めしたい。

究極の「似ている」

＊

文学も芸術も映画もスポーツも「似ている」に満ち満ちている。世界は「似ている」に満ち満ちている。

何かを真似て似たものをつくり始めたのはいいが、人はそのつくったものに似たものをどんどんつくることを無意識に覚え、その結果、複製文化どころか、複製文明と大量生産文明を築き上げ、今日にいたるのではないか。

似ているの増殖、似ているの自動生産、大量生産。どうにもとまらない状態。そして世界はどんどん暖かく暑くなっていく。

とはいえ、誰も目まいを起こしたくないから、「似ている」ことには目を向けないし、耳を傾けないでいる。「似ている」や「そっくり」とは、ほどほどのお付き合いをするべきということか。

＊

「似ている」と「そっくり」——。何かに似ている、そっくりだと思い、何だろう何だろうと考えていて、文学も芸術も映画もスポーツ、複製文明と大量生産文明、大量生産と思いをめぐらしていて、はっとする。

「似ている」と「そっくり」は、お金に似ているし、そっくりなのだ。そして、その身振りは人に似ている、そっくりなのだ。

もし地球外生命体が、地球を見たとするなら、人はあちこちで同じ仕草と動作と表情を演じているように感じるのではないかと思えるくらい、そっくり。多量のさまざまなそっくりを生みだし、そのそっくりとそっくりな身振りを演じている。

自己引用、自己擬態、自己形態模写。ひょっとすると地球外生命体は笑ってしまうかもしれない。ギャグとしか思えなくて。

＊

究極の「似ている」と「そっくり」は紙幣、つまりお金。お金は「似ている」どころか「そっくり」どころか、「同じ・同一」に限りなく近くなければならない。精巧をきわめる。偽造を防ぐため。

ほぼ「同一」だから、計器によって計測可能。人の知覚だけでは真偽は判断できない。

お金は何に似ているのか？　数字ではないか。抽象度マックスな数字。似ているやそっくりの世界ではなく、同じ・同一の世界。

数字と同じく抽象だから、何にでもかえられる、換えられる、変えられる。こんな便利ですごいものはない。素晴らしいものをつくったものだ。だから、どんどん刷る。

真似てつくる。そっくりにつくる。間違いは許されない。似ていなかったらアウト。下手すると犯罪、いや下手しなくても立派な犯罪。

本物のお金をどんどん刷らなければならない、鋳造しなければならない。印刷機や鋳造機でどんどん刷る。究極の精巧さで複写し複製し、大量生産する。

刷ることができるのは一部の人だけ。政府だけ。正確に言えば、政府の銀行と造幣局だけ。こども銀行は、こどもにだけ許される。

そっくりの本物がどんどん増えていく。実体なんて関係ない。人は存在しないもので動く。おとなのやることはほんまもんやからこわいわ。どんどん増やす、ついでに殖やす。実体はなくてかまわない。そんなところも数字と激似。

私には、印刷されていく紙幣のありようが人の身振りに見えてならない。

＊

電子マネー、ポイント、スマホ決済。

記号と化したお金、マネー、紙幣。触ることも見ることも匂いもしない記号。似ているやそっくりのない、おそらく同じや同一もない世界。

虚ろな記号。似ているやそっくりのない記号。実体のない、ふえる増える殖える。

ふえるという身振りだけが空転する。人は存在しないもので動くの進化であり洗練なのか？　その新たな展開なのか？　あるいは、その枠内での展開にすぎないのか？

紙幣のない印刷機、硬貨のない鋳造機。機械の音だけがむなしく響く工場。

何だろう？

何かに似ている気がするが、何に似ているのか、思いつかない。ひょっとすると、何にも似ていないのかもしれない。似ているが空転する。なぞるをなぞっている。なぞをなぞっている。

なぞるをひたすらなぞる、空（くう）をなぞるというのは、人の身振りそのものではないか。人はなぞるをつくりだし、それを無自覚かつ無意識に模倣しているのではないか。こんな荒唐無稽な空転が永遠に続くはずがない。ギャグは人の消滅とともに終わるはず。

中身とづらがずれているという話

＊

「仮面」とか「能面」を見て、気味が悪いと感じる時がありませんか？　最高に不気味なのは、何と言ってもデスマスク。デスマスクもマスクデス。一度だけ、お能を観に行ったことがあるのですが、あまりにも退屈なので途中で眠ってしまいました。能面をデパートの催しで間近に見たことがあります。もちろん、展示してあるものでしたが、見る位置によって「表情」が変わって見えるのです。ミステリアスなものを感じました。

「表情」という言葉があります。個人的な意見なのですが、「表情」も一種の「仮面」だと思います。文学的な言い方ですが、「表情をまとう」なんて表現もあるくらいです。「表情を浮かべる」という言い方なら、日常会話でも出てきますね。ポイントは、表情は「浮かんでいる」ということです。要するに、内心は分からない。ベール（被い）に包まれている。

＊

やっぱり、「表情」は一種の「仮面」ではないでしょうか。演劇で考えてみましょう。劇場でのお芝居にしろ、テレビドラマにしろ、映画にしろ、劇は「ステージ＝舞台」や「スタジオ」で行われます。観客との間が離れているわけですから、濃いめの「メイク＝お化粧」をしますね。「化粧」は文字通り、「化ける」ことです。役者は「化ける」ことによって、喜怒哀楽などの表情を誇張し、隔たりのある場所にいる観客に伝えるわけです。

すると、「顔＝面＝表情＝化粧＝表象＝象徴」という、つながりが見えてきます。同時に、これらのものに、どこか「あやしい＝怪しい＝妖しい＝面妖（めんよう）」というイメージが備わっているのも、何となく分かる気がしませんか？

「顔＝面＝表情＝化粧＝表象＝象徴」に、もう一つ付け加えたいものがあります。「かつら」です。広辞苑によると、「かつら」は「かずら」「かづら」でもあるとのことです。分かったずら？「かつら」も、一種の「象徴」だと言えそうです。人形は顔が命。オヤジはヅラが命。政治家と公務員はおもてヅラが命（もちろん、いいお仕事をなさっている人

もいます)。言えてませんか？ 中身とづらがずれている。よくできたづらほど値が張る。しかも鉄面皮。

かつら、お面、仮面、お化粧、表情、顔つき――こうしたものは、さきほど書きました「表象の働き」とか「象徴の仕組み」という言葉でひっくるめることができそうです。要するに、Ａの代わりに「Ａではないもの」を用いることです。ぶっちゃけた話が、何かに「化ける」ことです。もう少しお上品に言うと「装う」ことです。

＊

どうして、人間は、Ａの代わりに「Ａではないもの」を用いる、などという奇妙なことをするのでしょう？

個人的な意見を申しますと、人間が地球で威張っていることと関係があるような気がします。「威張る」というのは、文字通り「権威」をからだに「張る」こと。つまり、「虎の威を借りる」ということです。

以上のことから「虎の威」とは「虎の衣」にほかならず、雷さまがはいている虎の「皮」のパンツと同じだと言えそうです。また、パンツは「メンツ＝面子」に似ています。これも駄洒落ですが、意外と言えてませんか？

ひょっとして、人は「面子＝体面＝面目」のために、正確にいえばメンツを保つために象徴をまとうのではないでしょうか？　なぜって、中身とづら（面）がずれているからです。メンツを揃えるためでないことは確かなようです。

見られていない気配

＊

はい、読む快楽はあると思いますよ。

私の場合には見る快楽なのですけど。テクストの快楽とかいう、ややこしそうな学問っぽいものではありません。単純明快。文章を見るだけ。小説なんか一度まばらに読んだものを、まだらにながめています。私の意識はまだら状みたいです。

好きな文字や文字列が、ところどころ、つまりまだらにあるので、順不同でそこだけを見ているのです。まだらをまばらに見るのですから、いい気持ちになります。あまり考えることがないからでしょう。

もちろん、少しは考えます。文字を相手にまったく考えないなんて無理です。意味とイメージと形のあいだを行ったり来たりすると言えます。抽象と具象のあいだを行き来するとも言えそうです。ただストーリーや内容を追うのは苦手なほうです。意識散漫でうかつなのだと思います。

＊

そうですね、辞書もよく見ます。

英和辞典では figure という語の語義や語源をながめていると、気が遠くなりそうになります。綺麗です。連想ゲームのように並んでいる文字たちが見せるダンスもバレエのように綺麗ですし、語義としてあがっている日本語の言葉の字面が意味に擬態しているさまには息を飲みます。

いいですか、英語の単語が見出しにあるのに、日本語の言葉が並んでいるのですよ。一対一ではなく一対多の対応。不思議です。それがまた綺麗なのがさらに不思議。みんないい顔をしています。いい顔が一堂に会した集合写真の趣があります。一編の詩にも見えます。

辞書でお薦めしたいのは、短い言葉です。短い語ほど長い語義があるのが辞書の特徴です。一目瞭然なのです。a なんて数ページにわたるじゃないですか。一対一ではなく一対多の対応の不可思議さ。英語もフランス語も、そしてもちろん日本語もそうです。「あう」同士のスリリングな遭遇とか、「かわる」のめくるめく変身ぶりなんて推しです。

いくら見るのがいいとはいえ、辞書は読まないわけにはいきませんから、一度読んだら、あとはひたすらながめるのです。見ているのですから、こうなるともう顔をながめているようなものです。本にも、文章にも、文字にも顔がありますね。やっぱり、話は顔に落ち着きます。

＊

あと、見られるという瞬間があります。

文字に見つめられる。文字は顔ですから、当たり前なんです。見れば見つめられる。鏡と同じですね。見れば見られているのです。

瞳と同じです。鏡の中の目の中の瞳でも、面と向かっている相手の目の中の瞳でも、同じです。瞳の中に自分の姿があります。文字に瞳があるのは感じられませんが、見られている気配はあります。濃厚にあるというべきかもしれません。

文字や文章に自分を投影するとか安易な考えが浮かびますが、そんな抽象ではない気がします。この見られる気配はリアルすぎて言葉にならない気がします。どんなに言っても、言葉をつかう以上、抽象になります。

投影という比喩自体が、抽象という言葉の視覚的な説明みたいに感じられます。ほら、やっぱり話が抽象的になりますね。とてもリアルには追いつけません。何がって、言葉がです。

見ているという気配、そして見られているという気配、これが自分なのかもしれないとよく思うのですが、文字をながめていると実感できますね。

＊

生まれた時にすでに外にあった言葉は、文字どおり外から入ってきているわけですけど、声が消えるのに対して、文字は模様ですから残るじゃないですか。文字には顔があるじゃないですか。その顔に表情が浮かぶ。

これは永久にあるものじゃないんですよね。目をつむれば、消えます。ないのと同じです。文字はインクや液晶という物質がなければ存在できないのですが、物質からなる形のある物はいつか必ず壊れます。そもそも人が書く以前には文字はなかったわけですし。

いま目をつむっているんですけど、あなたには、目をつむった私が見えるでしょうか？
私の気配、私が見ていない気配——私が見ている気配ではなく——を感じますか？
あなたも目をつむってみてください。私にはあなたの気配、あなたが見ていない気配が感じられます。

きっと、顔とか表情って気配なんですよ。おそらく、見ている見ていないは関係ないんです。文字という顔だけを介してのつながりなのですから、当然なのかもしれません。あ、英和辞典で figure を引いてみてください。見るだけでいいのです。綺麗ですよ。いい顔に出会えますよ。

スクリーン越しに

＊

ここはどこなのでしょう。

ＰＣに向かって、note の下書き画面に文字を並べているいま、私は note という空間にいると言えそうです。頭ではそう意識していますが、果たしてここがどこなのかは、いぜんとして不明です。

自宅の居間でテーブルに着きＰＣ画面に見入っているいま、私は「日本国、〇県、〇市、〇町、〇番地にある自宅の居間にいる」というわけです。そうなんでしょう。頭では分かっています。それでもここはどこなのかはいぜんとして分かりません。事実だといわれることを紋切り型の言葉で記述したところで、体感が納得してくれないのです。それは知識であり情報なのす。

意識と体が遊離しているのでしょうか。そう言い切れない気もします。体あっての意識というか、個人の意識は個人の身体に深くかかわっているように思えます。

目とか意識だけになって空を飛びながら地上を俯瞰したり、目の高さほどの視線でふわふわと道を進んでいく夢を見ることがあります。寝際の夢うつつでもそういうことをよく経験します。

＊

空を飛ぶ夢を最近見ていないなあと思っているうちに、『飛ぶ夢をしばらく見ない』というタイトルの小説を思いだし、二階に上がって書棚の脇に積んである段ボール箱からその本を取り出しました。どこにどの本があるのかは何となく覚えています。体が覚えている感じなのです。

いま山田太一の新潮文庫版『飛ぶ夢をしばらく見ない』を手に取りました。

”あと二ヶ月と数十日で四十八歳になるという動きのとれない冬の日々――比喩ではなく、私は右足の大腿骨を骨折してベッドに固定されていた――私の内部の芯のようなところで現世的なものからの離脱があった。”
（山田太一『飛ぶ夢をしばらく見ない』新潮文庫 p.1）

このように小説が始まります。「私」という男性の語り手の置かれた状況が簡潔に示されているので、すっと作品に入っていけそうですね。この語り手がいる入院している病院の近くで列車事故が起こり、負傷者たちがこの病院にも運ばれてきます。四十半ばの「婦長」が語り手に言います。

”「一晩で、絶対なんとかするって事務長の方からはいって来てるんですけど、この階の向こうの端の個室へ移って貰えないですか？」
「いいですよ」
「ちがうの。個室たって向こうにもう入っている人がいるわけ。だから少し狭い二人部屋ってことになるんだけど、向こうの人はいいっていってくれたの。間に衝立を置くし、どうかしら、と思うんだけど」
（中略）
「だったら、衝立なんていいですよ。行きますよ」
「衝立は、実はあちらの方の希望なの。女性なの」
「――」
「両方動けないし、一晩だけだし」”
（山田太一『飛ぶ夢をしばらく見ない』新潮文庫 p.14）

ご存じの方が多いと思いますが、山田太一は著名な脚本家です。この小説は会話が多く、ストーリーを展開する上での要を押えた巧みな会話でぐんぐん読者を引きこみます。この部分の会話は、小説を書いている者にはとても勉強になります。

こうして語り手の男は衝立（ついたて）越しに、ある女性と声だけでつながるという一夜を過ごすことになるのです。

＊

ところで、いまこうやってパソコンに向かって文章を書いている私と、何らかの端末で私の記事を読んでいるあなたはどこにいるのでしょう。下書きを書いている私の「いま」と、投稿された記事を読んでいるあなたの「いま」は当然のことながらずれています。リアルタイムに接しているわけではありません（ましてや対面しているわけではありません）。

べつに不思議なことではありませんね。本や雑誌を読んだり、映画やテレビを見る時でも、同じことが起こっています。ライブでない限り、制作する側の時間と鑑賞する側の時間はずれているのが普通です。

話を文章に限れば、書かれている内容の時間、書き手が書いている時間、読み手が読んでいる時間、読み手がその文章を想起する時間は、それぞれずれています。「時間」を「場所」に置き換えても同じです。ずれています。

とはいえ、普段はそうしたずれを意識することはありません。興ざめするからです。それが人情だからです。

そんなずれ――時間のずれであると同時に場所のずれ――を意識し続ける人生なんて楽しいわけがありません。いまここで、ある出来事をあたかも「いまここ」で起きているように頭の中に浮かべるのが普通だからです。その方がずっと気持ちがいいと体と意識が知っているからかもしれません。

でも、ずれているのです。屁理屈だと言われるのは覚悟で言っています。

あなたの見つめている画面の文字が実は画素の集まりだとか、太陽が東から昇って西に沈むように見えるのは錯覚なのだとか、あなたの聞いているアーティストの声は実はデジタル化された信号をスピーカーが再生しているのだといった、聞けばがっかりするような戯言は屁理屈だと非難されるのが人の世界なのです。それでいいのです。非難する人のほうが健全なのです。

＊

”すると、かすかに尿の匂いがした。
俺も溲瓶でやるのだが、やはりテレビをつけなければならないのであるか？　夜中は、どうしたらいいのかであるか？”
（同書 pp.27 － 28）

想像してみてください。お互いに容易に身動きできない体だといっても、「スチールパイプの枠にライトブルーの布を張った」衝立を隔てて、異性の二人が同じ病室で夜を過

ごすのです。

”十時をすぎても遠く作業をする人々の音と声が聞こえた。
　女が何かをいった。いった気がした。
「は？」
　答えがない。
　すでに灯りは消していた。寝言かもしれない。
（中略）
　三十代だろうか？　もしくは四十代そこそこ。声の印象はそのようなものだった。細く小さい声なので、小柄で痩せた人を想像してしまう。あてがはずれることも多いので、美人かどうかは保留しておく。
「ししゅうに――」と女がいった。
　刺繍に？　詞集に？　死臭に？
「ええ――」
「よろしいかしら？」
「どうぞ。今日は、すぐには眠れそうもありません」”
（同書 pp.28 － 29）

　衝立で仕切られた部屋で、声だけを頼りに「誰か」が「誰か」と話す。その時の、二人は何でつながっているのでしょう。

　刺繍に？　詞集に？　死臭に？――ここは少々滑稽ですが、おそらく数メートルしか離れていない二人のあいだにある、埋められない「隔たり」を感じて、すごく悲しいです。

　頼りが肉声であっても、電話越しの「音声」であっても、ネットを通した「画像と音声」であっても、液晶画面に浮かんだ「テキスト（文書）」であっても、事態は変わらないのではないでしょうか。

【病室】
　私
――衝立（スクリーン）――　声、音、匂い、気配
　女性

【ネット】
　私

――スクリーン（画面）――　文章（言葉・文字）、写真、絵、動画、音声
　あなた

「いま」と「ここ」は具体的かつ自明であるように見えて、抽象的かつ不明なものではないでしょうか。こう書きながらも「いま」と「ここ」については、さっぱり分かりません。

＊

　病室で衝立越しに聞こえる声や漂ってくる匂いや伝わってくる気配は、それを発する人そのものではありません。その声や匂いや気配は、その人ではなく――知覚の対象となるという意味で――、置き換えられたものに他なりません。

　スクリーン（画面）で読む文字（言葉）は、その人の思いそのものではありません。ましてやその人自身でもありません。文字も音声も、置き換えられたものに他なりません。要するに知覚されたものなのです。

　何かをその何かではないもので置き換える。たとえば、「画素の集まり」を「文字という点と線の集まり」や「言葉という手で触れることができないもの」や「意味というこれまた抽象的なもの」、つまり「画素の集まり」ではないもので置き換える。

　そうした錯覚の上に人とそのいとなみは成立している気がします。

＊

　声や匂いで人を感じる。文字や音声で人を感じる。「いま」と「ここ」は「あの時」と「向こう」。

　声に恋して悪いでしょうか。言葉に恋することなど、古今東西で行われてきた人のいとなみではないでしょうか。私はいまあなたのことを考えています。そう、記事を読んでくれている、あなたです。

　あなたにとっての私は何なのでしょう。文章なのでしょうか。言葉なのでしょうか。もしそうなら嬉しいです。百歩譲って、文字でもいいです。せめて、そうであってほしいです。

ただ画素の集まりだとは思ってほしくないです。

贅沢でしょうか。

私は言葉

＊

楽曲を聴くように読める文章にひかれます。簡単にいうと、夜なんかにぼーっとしながら読める文章です。とはいっても、ある文章をどう読むかは読む側の問題であり、書かれている言葉はただそこにあるだけだという気がします。

ひとさまの文章を例に取ってあれこれ言うのは気がひけるので、拙文をあげます。

「世界は顔で満ちている――人は夜になると洗濯をする」という記事は、楽曲のように読めるようにと意識して書いた文章です。自分で書いたものですから好き勝手を言いますが、これは内容がないような文章なのです。あれよあれよと読んでいただければ、そんなうれしいことはありません。

レトリックだけでなりたっているという言い方もできるでしょう。この記事は思うことをつづっただけで、深い意味はありません。もし意味があるとすれば、読む人がイメージをいだいてくださるからです。なにしろ、顔について書いてあるのです。

顔とそこにあらわれる表情は、その顔の主から離れて存在している気がします。自分の顔や身近な人の顔を思い浮かべてください。思いや感情とは関係のないとらえ方をされて、とまどう、困る、争いの元になる、こんなことはざらにありますよね。そもそも自分の顔を直接見た人なんていませんし、まして常に自分がどうなっているかなんて誰にも分からないのです。

ところで、私は言葉です。私は言葉なのです。

とつぜん、ごめんなさい。私は言葉ですの「私」とは「星野廉」という人物のことではなく、ここに書かれている言葉のことです。みなさんがいま目にしてお読みになっている文字からなる言葉と文章の話をしていると考えてください。

語り手が変わったと考えていただいてもかまいません。変わったというのは、星野廉から私にです。でも、顔とその表情と同じで、両者を分けることはできません。分けられないから分からないとも言えます。

わけの分からないことを書いてごめんなさい。分けられない＝分からないを体感していただきたかったのです。こういうのを星野廉はレトリックと呼んでいます。面倒くさくて偏屈ですが意外とお茶目なのですよ、あの人は。身びいきな言い方になりますけど。

“私は言葉である” とか、“私は言葉だ” とか、“私は言葉” というように、ちゃんと" "でくくってグーグルで検索してもあまりヒットしないのに驚きます。以下はその検索結果です。

“私は言葉なのよ” との一致はありません。
私は言葉なのよの検索結果 (引用符なし):

私は星野廉が書いたものには違いありませんが、星野廉を離れて存在して、みなさんの目に触れ、みなさんの内に入っていきます。みなさんの目に触れた瞬間にみなさんのものになっているのです。

みなさんの中に入った私は、もう私にはうかがい知れない私になっています。もちろん星野廉にもわからないし知り得ない私になっています。でも、私なのです。私は言葉であり、一種の名前みたいなものだとも言えるでしょう。

不思議ですね。私は人の中から出たり人の中へ入ったりするし、ほかの文章にも私はいるし、これまで私はなんど話されたり書かれたりしたことでしょう。星野廉なら「抽象」と言うでしょうね。あの人の好きそうな言葉です。

私は私。私は言葉。私は文字。私は音声。私は意味にもなり、人の内でイメージを生んだりする。

ちなみにイメージとはその人だけに通じる荒唐無稽なギャグみたいなものです。その意味で意味とは対極にあり、私はこのイメージこそが言葉の存在意義だと考えています。簡単にいうと、イメージとは夜なんかに――べつに夜でなくてもいいのですけど――、

ぼーっとしているとやって来る、あれのことです。

　以上、あれよあれよと読んでいただけたなら、そんなうれしいことはありません。深い意味はないのです。内容なんてないようなのです。

とっかかり

＊

文章を書くときには何らかのとっかかりが必要だと思われます。私の場合には、よく言葉を並べます。そのうちに言葉が言葉を呼び寄せる感じで文章が書けてくることがあるのです。

もちろんぜんぜん書けないで終わることもあれば、数行書いただけで中断することもあります。

書きだす前に言葉を並べるのですから、白紙の状態で臨むわけではなく、漠然としたものが頭の中にあって、それを呼び出すために言葉を並べているのかもしれません。並べる言葉を選んでいる時点でもう執筆に入っているとも言えるでしょう。

いま私は「とっかかり」について書こうとしています。頭の中で、とっかかり、よりどころ、よすが、たより、というぐあいに言葉を並べて転がしているうちに第一文が出てきて、その文を眺めながらその続きを書いています。こういうのをでまかせとも言います。文字通り、出るに任せるわけです。

なぞるのにも似ています。雲を眺めていて、それが何かに見えてくるのに似ているなあと感じるので、見えるとなぞるはとても近いのではないかと思います。あくまでも私の中での話です。

この記事を書きはじめる直前に感じた、とっかかりについてのとっかかりを探し求めるさいの、ぞくぞくするような気分について、いま考えているのですが、このぞくぞくは、私がものを書くときにとても大切にしているものなのです。

たったいま書いた上のセンテンスですが、繰りかえしが目につきますね。書きながら気づいて苦笑してしまいました。とっかかり、について、ぞくそく、書、もの、です——というふうに重複しています。

重複に気づくとふだんはそれを避けるように書き直すのですが、いまはそのままにしています。とっかかりについて書いているからです。必死でとっかりを求めているのが具体的な言葉の身振りとしてあらわれているからです。

書いている言葉を書いているテーマに擬態させているとも言えます。変なことをしているとお思いでしょうが、これもとっかかりを求めた結果なのです。こういう自分の妙な癖は愛しいものです。

言葉とテーマを擬態させる、シンクロさせる、からませる。言葉が言葉に擬態する。シニフィアンがシニフィエに擬態する。

簡単な例を挙げると、ことばはひらがな、コトバハカタカナ、古斗葉波万葉仮名、kotoba wa romaji。Words are words.　とか、言葉は笑い（笑)、言葉は草 www、言葉はいやーん///、@＋＆X暗号、こ鳥羽は変換ミス。

いまのは半分冗談箸休めなのですが、これまでに私はこの種の書き方レトリックを何度もしてきたので、味を占めているのかもしれません。常套手段というやつです。恥ずべきことなのでしょうけど、年を取ってくると面の皮がだんだん厚くなるもようです。

言葉は言葉。私は言葉。

いまのは本気です。こういう擬態レトリックだらけの記事を書くことがあります。これが私にとってのとっかかりみたいです。

＊

話しているうちに言葉につまって、しどろもどろになることがありますね。私はああいう瞬間が好きです。

何とか言葉を出そうとして、支離滅裂な言葉を吐いてしまうこともあるし、あれれという感じで言葉が出てきて何とか意味をなしているのに自分でも驚きながら言葉を続け

ることもあります。つまり、よりどころがなくなって、とまどっているのに、あれよあれよと言葉が出てくるのです。

あれは何なんでしょう？　何かに助けてもらっているのでしょうか？　そのよりどころにしている「何か」とは外にあるものなのか、内にあるものなのか。外とか内とかいう言葉とイメージではすくえない「何か」なのであって、だからこそ「何か」と呼ぶしかないものなのか？

＊

ぞくぞくとかわくわくとかどきどきを感じる文章があります。今度はひとさまが書いたものの話です。最近気づいたのですが、私がぞくぞくする文章にはとっかかりがないのです。いや、とっかかりが感じられないというべきかもしれません。私が勝手にそう思っているだけですから。

どうなっているのだろう？　なんでこんな文章があるんだろう？　いったい、これはどういうことなのか？

出会ったときの気持ちをあらわそうとしても、こんな言葉しか出ないのです。

たとえば、固有名詞（特に人名）によっかかっている文章にはそういう気持ちをいだきません。

ほらほら、おまえの好きな〇〇だよ、どう、おいしいかい？　〇〇印のお豆だから、ぜったいにおいしいはず。

これじゃ、えさを目の前にばらまかれた鳩と同じじゃないですか。どこかから持ってきたえさで釣られたくはないですよ。あなたのつくってくれた料理を食べたいのです（オリジナリティなんてたいそうなものは求めていません、手でつくってくれたものが食べたいだけです、お礼に私もつくりますから）。これって贅沢ですか？

固有名詞だけでなく、流行の言葉やビッグワードによっかかっている文章にも似た気持ちを覚えます（そうした言葉を出しても、それによっかかっていない文章は別です）。

差し障りがあるので、どんな言葉かは具体的には書けませんが。

　そうした言葉は、ある社会や集団に共有されたイメージによっかかっていますから、文章を読んでいても、ああ、あれね、あの話でしょ？ それくらい知ってるわよ、という感じですんなり話に入っていけます。安心して読んでいられるわけです。つまり、すでに知っていることや以前から分かっていることを確認する作業です。

　一方で、どうなっているのだろう？ 的な文章には、なかなか入っていけません。とまどうわけです。それこそ、というか、まさに、読もうにもとっかかりがない感じがするからです。

　読むという行為は一方的なものですから、書いた人が目の前にいない限りは、あれこれ自分で考えなければなりません。ああ、わけがわからない。なんだ、これ？　そう感じられる文章を、あなたはあえてお読みになりますか？

　自分のお金を出して買った本なら読むかもしれません。元を取ろうとして頑張るからです。でも、note やブログの記事だったら、どうでしょう？

　あるいは、〇〇さんの書いたものとか、〇〇さんのおすすめだから、無理をしても読むことがあるかもしれません。固有名詞、とりわけ有名人の名前の放つ光は強いからです。読む前に価値判断をし評価を下してしまうという意味です。

　でも、無名の人が書いた note やブログの記事だったら、どうでしょう？

　どうなっているのだろう？　なんでこんな文章があるんだろう？　いったい、これはどういうことなのか？

　読みかけてそんな気持ちになる記事が note やブログにはあります。ジャンルでいえば、小説、詩、エッセイ、批評、評論、その他……なんでもあります。いろいろなケースがありますが、とっかかりがなくてなかなか入っていけないけど、知らない間に読んでしまった自分がいる。そんな読書体験を味わわせてくれる記事があります。

偶然目にした記事、読む義理もない記事との出会いほど、「純粋な」読書体験はない気がします。目の前には言葉しかないのですから。

（もちろん、読みにくければいいとか、ややこしければいいという話ではありません。また新知識や新事実――そんなものがあるのでしょうか――や新発見が披露されているという意味でもありません。具体的な言葉の身振りや言葉のあらわれ方、つまり文章体験の話をしています。あと、ひとつ確かなのは、この読書体験は評価や評判や権威とは無関係だということです。）

そうした記事には固有名詞や流行の言葉やビッグワード――どれも読むときにとっかかりになるもので、これがあると分かりやすいし分かった気持ちになれます――はあまり出てきません（あったとしても、それに釣られて読んでいるわけではないのです）。ぜんぜん出てこない記事もあります、それも毎回（これがすごいのです）。

でも、ぞくぞくするのです。ぞくぞくわくわくあれよあれよ――こんな貧しい言い回ししか頭に浮かびません。あえて言葉にする必要すら感じさせないとも言えるでしょう。

こうした出会いはまれです。しょっちゅうあることではありません。だからこそ、またその体験を味わいたくて、そのアカウントに出かけます。同じ体験があるわけではありませんが、似たような体験があったり（がっかりもあります）、何度か訪ねるうちに、べつのわくわくやぞくぞくがあったりして、結果的にそこの常連になっているのです。

なんででしょう？　そこで何が起こっているのでしょう？　これは、おそらく個人的な印象の話なので、自分で考えるしかなさそうです。

ある事物や言葉について、誰もが、自分だけに通じるイメージを持っていると思います。そのイメージとは、その人だけがいだいている心象であったり風景であったり連想であったりします。たいていは人に伝えられないものです。一人受けするギャグのように。

また、イメージは不動であることはまずなく、うつりかわったり、ゆれうごくものであり、そのずれやゆれの度合いはさまざまである気がします。ひょっとすると、イメージとは、自分の意志や意思とは関係なく、あらわれ、ゆらぐものなのものかもしれません。壁の染みや雲の形のように。

それでいて、おそらく死ぬ間際までついてきてくれるという意味で愛おしくかけがえのない、あなただけのものなのです。

きわめて個人的なものですから（共同体に共有されるとかいうイメージについてはここでは考えません）、そういうイメージは辞書にも事典にも図鑑にも書物にも載っていないでしょう。

簡単にいうと、たとえば「カエル」という言葉を辞書や事典やネット上のサイトで調べても、いま話している意味での「カエル」のイメージと同じ――部分的に似たものはあったとしても――記述や映像は見つからないでしょう。

要するに、あなただけの「カエル」にまつわるイメージの話だと考えてください。似たものはあっても同一のイメージはないはずです。あなたのこれまでの生の総体（生き方、生きざま、日々の生活、生きてきた場所と時間）と深くかかわるものだからです。

あなただけのイメージという場は、たとえばカエルが帰るや変えるや買えるや虹（←蛙）や原発やシェイクスピアと結びついてもいてもぜんぜんおかしくない世界なのです。荒唐無稽や偶然、即秩序や必然であるような世界とも言えます。何もかもが肯定されるという意味では、夢や夢うつつに近い場ではないでしょうか。

そんな自分受けするだけの世界を言葉や絵や曲としてひとさまの前に出すためには、それ相応の芸や手法や様式広義のレトリックが必要であるにちがいありませんが、私はその手法を普遍性とは呼びません。通じることなどありえないと思うからです。

たとえばある個人的なイメージをあえて言葉にしたとしても、その言葉はほかの人には、また異なったイメージをいだかせるはずです。人それぞれなのです。

私がぞくぞくするのは、たぶん誰かの個人的なイメージに偶然に触れた、とっかかりのない瞬間であり一回きりの夢なのだという気がします。

私は言葉である

＊

「私は言葉である」という言葉をとっかかりにして言葉をつづってみると、いろいろな気づきがあります。

「私は言葉である」とは、星野廉という人物が、「自分は言葉である」という比喩を用いて書いている文にも取れるし、言葉が自分のことを自己紹介している話にも解釈できます。また「言葉（ことは)」という名前の人やキャラクター（登場人物）である可能性も浮かんで、きりがないのです。

　まさに語るは騙るであるというぐあいに、語るに落ちるという落ちになります。

　なんでこんなことを書いているのかといいますと、「私は言葉である」に似た設定の小説を書こうとしていて、そのためのとっかかりを求めているからなのです。

　この小説は未完のまま放置しているものなのですが、ときどきやって来て私の袖を引っぱるのです。ねえねえ、廉さん、まだなの？　もうそろそろでは？　私、我慢できない。

　いま書いた文ですが、その未完の小説になりきっている自分――「私は小説である」的な心もち――を感じます。とても他人事とは思えないのです。そりゃあそうですよね、自分の作品とは、たとえそれが未完であったとしても、自分の子どもみたいなもので愛おしいしかわいくてならないのです。まして長くほったらかしにしていたとなると不憫でなりません。ごめんね。

　どうしましょう。久しぶりに訪ねてきたその子に情が移ってしまい、心中穏やかではない気分になりました。子をもった経験のない私ですが、こういうことはよくあります。とつぜんやって来るのは、我が子のような存在だけではありません。

＊

（以下は引用です。）

このところ、夜になるとやって来る女性がいます。枕元に立つのです。顔はよく見えないのですけど。というのは、半分冗談です。神仏のたぐいは信じていませんし、超常現象とか神秘体験みたいなことはほとんど無縁で生きてきました。でも、半分冗談ですから、半分は本当なのです。

夜な夜なやって来るのは、書きかけで放置してある小説の登場人物です。長い間温めているにもかかわらず、なかなか完成できない小説がいくつかありますが、そのうちの一編の主人公さんなのです。その人とはそれほど長い付き合いではありません。お付き合いを始めて二年くらいになります。

（拙文「一人でいるべき場所」より引用）

＊

ただいま引用した文に出てくる「女性」は、note の記事という形で（成仏させてじゃなくて）務めをまっとうさせてやりました。あの記事は一種のメタフィクションだったというわけですが、メタフィクションもフィクションです。ちなみにデスマスクもマスクです。

ここまで書いてきて思ったのですが、ものを書くときにはいろいろなものにうつりかわる、または擬態する自分がいます。この状況は何かに似ていると考えていて、読むのに似ていると思い当たりました。読むことは書くことだ、書くことは読むことだなんていう、文学理論の本に書いてありそうな高尚なお話レトリック＝トリックではありません。

文章を読んでいるときには、読みながら、書かれていることだけでなく、書かれてもいない以外のいろいろなものやことが次々と頭に浮かびます。

集中力が散漫な私だけに当てはまることかもしれませんけど。

要するに、読んでいる最中にさまざまなものやことのあいだを行ったり来たりするのです。何がって、たぶん私（自分）星野廉 and/or 言葉がです。書かれている言葉がいろ

いろなイメージを呼び起こすのかもしれません。読んでいる言葉や文字を離れて、脳や神経が軽い暴走を起こしているのかもしれません。

こういうことは、映画やテレビを見たり、歌をうたったり、その辺を歩いていたりしても起きます。まして、文章を書いているときにはかなり強くというか激しく起こっている気がします。

歳のせいかしら。話す相手がいないのでわかりません。

飛躍した言い方になりますが、思うとき、書くとき、読むとき、聞くとき、触っているとき、匂いを嗅ぐとき、舌で味わっているとき、感じているとき、人は一時的に何かになっている、あるいは脳と神経をふくむ身体でなぞっているのではないでしょうか。憑依なんて言いませんけど。

自分がどこどこに住むだれだれであるということを一瞬あるいは部分的に忘れてしまう。何かになるどころか、ときにはなりきってしまうこともある――。そのとき、意識はあるのですが、まばらであったり、まだら状になります。

これも、常にぼーっとしているとよく言われる私だけに起こっていることなのかもしれませんけど。

＊

この文章を書いていて思ったことなのですが、タイトルが「私は言葉である」だからなのか、私は言葉である、私は文章である、私は未完の小説である、私は文字である、私は画素である、私はＰＣの画面である.....なんて具合に、いろいろなものになる、つまり擬態する自分を感じるのです。行ったり来たり、入ったり出て行ったり、スイッチが入ったり切れたり、とにかくせわしないのです。

よく考えると、いま始まったことではなく、これまでもそんなふうだったようにも思えます。

私は自己暗示をふくめて暗示にかかりやすい人間なようです。そんな気がするとそん

な気になってしまうのです。じつに乗りがいいというか、単純だというか、浅はかきわまりないというか。お酒や薬物にも弱くて、聞くところによるとすぐにころりと効いてしまうらしいのです。

言葉こそが人にとって最強の嗜好品であり薬物であり麻薬ですから（何しろ人は言葉に依存し嗜癖しています言葉なしには生きられません）、私みたいな軟弱な人間が言葉にころりと参るのは当然だという気がします。

＊

話を戻します。

「私は言葉である」に似た設定の未完の小説があって、その命をまっとうさせてやりたいという話でしたね。

.....ここにいると、君と僕との間に起きた出来事が記憶ではなく小説のように思われてくる。僕がこうやって過去の出来事の記憶を言葉としてつづっているせいだろう。書かれた記憶は、まるで小説のようだ。自分の書いた文章を読み返していると、いったい誰が書いた物語なのだろうと不思議な気持ちになることがある。確かに書いたのは僕だ。書いた記憶があるからね。ただいったん書きとめられ文章となった、出来事の記憶を読み返すと、果たしてその文章は僕が本当に書いたのだろうかという思いが頭をもたげてくることがある。そういう時の僕はひどく疲れているのだ。

身体がないのに疲れるのはおかしいと人は思うにちがいない。でも疲れるんだ。頭だけになった、いや正確に言えばおそらく脳か意識になったらしい僕なのに疲れは感じる。眠くもなる。そして眠りに落ちる。夢を見る。夢を見ない眠りもある。夢を見たのを覚えていない場合もあるだろう。そして目覚める。ここはどこ？　寝覚めが悪いと決まってそう思う。少し考えて、ああいつものここね、とつぶやき諦めとともに完全な覚醒を待つ。すっかり目が覚めると、ネット内をあちこち歩き回るか、考えごとをする。

考えごとばかりに耽っていると収拾がつかなくなっていらいらするから、こうやって思いを文書にする。言葉はその時々の思いや感情を文章という形で固定するから、支離滅裂になりがちな僕の思考を抑制しなだめてくれる。書かれた言葉を眺めていると不安が消えて気持ちが安定する。そんなわけで、文章を書いている時がいちばん生き生きする。いったん書かれた文章には妥協するしかない。いじり出すと収拾がつかなくなるか

らね。最近よく考えるんだけど、ただ書いているだけでは駄目だ。ただひとり言を書いているのと君に当てたメールを書いているのとは雲泥の差と言っていいほど違う。君に話しかける時、僕は幸せを感じる。

書くのに疲れると、例の感情に支配される。これは誰が書いた文章なのだという疑問だ。自分が自分以外の誰かの書いている物語の中にいるような居心地の悪い気分と言ってもいい。いっそのこと自分が架空の存在だったらどんなに楽かと思う時がある。そんな時には自分を突き放して見つめている自分がいる。自分は突き放されているのだけど、何か大きな存在に身を任せている安心感がある。.....

以上が、その未完の小説の一部です。タイトルは決まっていなくて「意識だけ」という名前でテキストエディタのファイルに収めてあります。

この「僕」というのは、意識だけになってネット上でメールを書いているのです。意識だけと言いましたが、脳をふくめて身体がないのです。その存在を確認できるのはメールという形の文章だけ、つまり「僕は言葉である」「僕は文章である」、「僕は未完の小説である」、「僕は文字である」、「僕は画素である」、「僕はＰＣ画面である」.....という感じ。

どうしましょう。

体調が悪いので、この小説の続きを書いて、なんとか終わらせることができるかどうか、自信はありません。「うわの空」という記事を書いたときもそうでしたが、この子は決まって私が心身ともに参っているときにやって来るのです。

ま、この「僕」が置かれた状況を考えると、私に頼ってくるのもわかる気がします。なんとかできるのは、私しかいないのですから。

ひとつ言えるのは、この文章を読んでいると「私は言葉である」感がとてもリアルに迫ってくることです。機が熟したといえば大げさですが、いまの私はまさに「私は言葉である」という心境にあり、これをとっかかりにして何か書けそうな気配を感じるのです。

「私は言葉である」という言葉をとっかかりにして言葉をつづってみると、いろいろな気

づきがあります。

「私は言葉である」とは、星野廉という人物が、「自分は言葉である」という比喩を用いて書いている文にも取れるし、言葉が自分のことを自己紹介している話にも解釈できます。また「言葉（ことは）」という名前の人やキャラクター（登場人物）である可能性も浮かんで、きりがないのです。

　まさに語るは騙るであるというぐあいに、語るに落ちるという落ちになりました。

VRで自分に会いにいったその帰りに

＊

写真機では長いあいだ自分を撮ることはできませんでした。簡単に撮れなかったというべきかもしれません。それがいまではできます。スマホのカメラで可能ですが、簡単というわけではないでしょう。誰もがけっこう苦労して撮っています。

いろいろテクニカルな問題があって苦労なさるのでしょうが、「こんなはずじゃない」とか「私はこんなふうじゃない」という不満が根っこにあって、スマホに付いているレンズを恨みつつ、撮る位置や光の具合を調節しているのではないでしょうか。

人は自分を自撮りで撮影し、その像をリアルタイムで見ることができるようになりましたが、それでも満足できていないもようです。がっかりしているからです。ちょっと違うんじゃない？　こんなもの？　これだけ？　という感じです。

鏡や写真や動画で自分を見る行為は、失望感と隣り合わせなのです。ぜんぜん納得できていない。だから、毎日毎日、お化粧やエステや身だしなみに骨身を削るのです。

その裏というか根本には、自分に会ったことがない、つまり肉眼で自分を見たことがない、さらに言うなら誰もが自分には絶対に会えないという現実があります。

現実はもどかしくままならないのです。世界でいちばん気になる人を見たこともなければ、一生会えないのですから。

＊

人が満足する形での究極の「自分を見る」とは、「別人として自分を見る」ではないでしょうか。自分が別人にならないかぎり、それが不可能だと分かっているので、失望感と不満は永遠に続くと思われます。「もっともっと」「もっと見たい」が延々と続くという意味です。

本当の自分の姿は、街ですれ違った見知らぬ人の目に映った自分だ。そんな意味のフレーズを古井由吉の文章で読んだ記憶があります。別人の目で見る自分ということでしょうね。いま考えると分かる気がします。

「光学的に見える」だけでは「本当の見る」ではないとも言えるかもしれませんが、この「本当の見る」はおそらく幻想でしょう。知覚に限界のある人間にはありえないという意味で強迫観念であり、抽象にちがいありません。

人の裸眼と肉眼は、無媒介的に世界を見る能力ではありません。しかも、どんな器具や器械や機械をつかって見たとしても、最終的には人はその映像を裸眼で印象として見るしかないのです。

ゆがめて、まばらでまだらに、しかもぼやけて見ているとも言えるでしょう。「見る」「見える」は人の想定しているほどの「見る」「見える」ではなく、あくまでも努力目標でしかありません。

＊

それだけではありません。人は「何か」に「何か」を見てしまうのですが、それどころか、自分が見たいものや自分が知っていると思っていることを見てしまうのです。

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということになります。

人は「見たいもの」（それが「見えない」にもかかわらず）を「見える」と決めるために、その根拠となりそうなものを求めるのです。

こうも言えるでしょう。人はないものをあると決めるために、その根拠となりそうな

ものを求める。捏造する。その根拠は何であってもかまわない。いわば、イワシの頭も信心からの「イワシ」は何でもあってもいいのです。

求める、でっちあげる――それが人の「見る」であり「見える」です。

＊

スマホで自撮りが可能になった気がしたとき、「自分が見えない」という不可能性の沼のなかにいる人間は歓喜したと思われます。「ついにやった！」と。

水面や鏡に出会って自分の姿が見えないという事実に気づいた人間は、写真に出会って一時的に歓喜したものの、すぐに失望し、つぎに映画や個人フィルムにもがっかりし、現像の要らないポラロイドにも意気消沈し、デジタルカメラと三脚をつかっての撮影にも落胆し、スマホカメラの登場でリベンジを果たそうとして張りきったのはよかったのですが、やがてその空しさにしょげこむ事態となりました。

ついにリベンジしたかの喜びは一時的かつ一過性のもので終わりました。「やっぱり見えなかった」「こんなはずじゃない」「こんなものか？」「話が違う」

欲求や欲望は目的を失っても空回りするそうです。

というか、まわること自体が目的化するらしいのです（経済活動や金融や資本主義がいい例です）。本来はまわらなければならない根拠がないだけに（根拠は捏造したものだからです）、しつこいということでしょうか。分かる気がします。人ごとではありません。

＊

きわめて近い将来に仮想現実で自分を見たり、自分に会ったり、自分と対面するゲームが流行りそうな強い予感があります。メタバースやアバターより進化した話です。自分を見たいというのが、大金を投じて宇宙空間に漂うよりも、身近で現実的な願望だという気がするからです。この欲求は自撮りの延長線上にあります。

どうやら自分を見るためには他人になる必要がある。めったに話題にはしないものの、人はそのことに薄々気づいています。

自分を見ることができないという恒常的な不満を無意識にかかえている人間が仮想現実に救いを求めるのは、ごく自然ななりゆきであり、必然であるとさえ思います。AIを駆使して個人情報である多量の映像や文書を処理し、CGを利用してその人をもう一人つくりあげる。

そのもう一人の自分に、もとの自分が会いにいく。見る。対面する。声をかける。対話する。触る。触られる。「相手」の汗の味を舌で感じたり、腋臭を嗅ぐことさえできるかもしれません。「相手」と「交わる」人が出てきてもおかしくはありません。というか、それが人の究極の欲求かもしれません。

満足のいくだけの臨場感をもって自分に会うことができるでしょうか。疑問に思われますが、これはやってみないと分からないでしょう。

＊

VRで自分に会いにいって気づくこともあるでしょう。考えられるのは、そこで会った自分が依然として見えないということかもしれません。正確にいうと、臨場感が足りない気がするのです。つまり、がっかりするのです。

VRで自分に会いにいって帰ってきてから気づくこともあるでしょう。考えられるのは、現実として目に映っている世界、聞こえてくる世界、匂いとしての世界、触れ触れられる世界こそが自分なのではないか、という思いかもしれません。

世界こそが自分である。この気づきと死後の世界や天国やあの世を見たいという願望は紙一重だという気がします。いまや人は来るところまで来ているからです。とはいえ、それが終りだとはとうてい思えません。

figure のかたち

＊

辞書をながめて楽しむことがあります。読むというよりも見るのです。もちろん読まずに見ることは無理なので、見るほうに傾いている読み方と言うべきなのかもしれません。

文字の意味やイメージだけでなく、顔や表情や形に魅惑されてうっとりする言葉に figure があります。複数の英和辞典をながめながら、書いてみます。

＊

figure の底にあるのは、形や、形としてあらわれることのようです。語源の欄に「でっちあげる」があってはっとします。形は「見る」という知覚から出たりあらわれるのですから、ないものをあるように見せると考えることもできそうです。

形、形態、形状、外観。こう変奏されると漢語の身振りの喚起力に感心します。それぞれが異なります。微妙な違いなのですが、それがまさに形を取ってあらわれているわけです。言葉の形が言葉の意味を擬態しているのか、あるいはその逆の事態が生じているのか、不明になります。イメージという印象の世界での話であることは確かなようです。

数字や計算の語義があるのは意外なのですが、おそらく数という抽象的なものを人が扱うためには、形のある物に置き換えないと難しいだろうと考えると分かる気がします。物を模した形が数字になったのかもしれません。頭に浮かぶのは指とか小枝とか小石です。あと貝殻も。

＊

人の姿を人影と置き換えると、その影というイメージに魅惑されます。自分の姿を肉眼では目にできない宿命を負った人間が、自分の姿を影として見る、水面に映った像として見る。はかなげで切ない気がしてなりません。影も水面の像も長くあるものではありません。

人が絵を描くことを覚えて姿が肖像となり、つくった話や物語の中に出てくる人が人物（人物と人は異なります）となったのでしょうか。絵や言葉からなるフィクションに人やその姿が生き生きとした形であらわれるようになっていった。そう考えると興味深いです。

図案、模様、文様、紋様、デザイン、図、図解、さしえ、図形。面白いですね。人において視覚がどれだけ大きな意味を持っているかがうかがわれます。「見る」が言葉を生み、「見る」が「まねる」「えがく」「かく」「つくる」という一連の行為を増殖させていったのでしょうか。

＊

日本語で頻繁につかわれる「フィギュア」はダンスやスケートのフィギュア、つまり舞台上や氷上に描く図形から来たもののようです。人形の「フィギュア」もカタカナでよくつかわれています。形を描く、形あるものをいじる。英語ではほとんどの名詞が動詞としてももちいられる点が、日本語を母語とする者には興味深く感じられます。

たとえば、Don’t dog me. で「（犬みたいに）私を追いまわすな」、Please water these plants. で「（花などに）水をやってください」となりますね。日本語では「行く（iku）」「食べる（taberu）」「整う（totonou）」みたいに「ウ段」で終わるわけですが、比較すると不思議です。

figure は「計算する、見積もる、数字で表す」「想像する、心に描く、思う、考える」「かたどる、彫像や絵画として表す」という動詞としてももちられています。

＊

音楽に無知なので「音型、音形、モチーフ」という語義の意味は想像するしかありません。音にも形がある。音が心の中に形となってあらわれる。そういうことでしょうか。うっとりするイメージですね。

「表象、象徴、比喩、文彩、ことばのあや」と並べると、個人的にはわくわくぞくぞくし

ます。「比喩で表す、表象する」「登場する、出る、顕著に現れる、重要な役を演じる」「筋が通る、意味を成す、理にかなっている」

もともとないものを心に浮かべるのは、空（くう）を「なぞる」に近い気がします。見えないけどなぞる。ひまつぶしになぞる。ぼんやり見えるものをなぞる。とにかくなぞっているうちに何かが見えてくる。見えてきたものを逃さないためになぞる。

空をなぞる。これがつくる、でっちあげるの一歩手前の身振りなのかもしれません。ただ次の一歩は長い気がします。なぞるが無数に繰りかえされて、たぶんいま創作や文芸と呼ばれるものがある。発明も発見も、そしておそらく文化や文明も。空をなぞるの次の一歩は永遠の途上なのではないでしょうか。

何をなぞっているかは人には不明。だから、なぞる。なぞりつづける。なぞるという身振りがあるだけ。

＊

英語にある一つの単語が、日本語にあるたくさんの言葉とイメージを呼ぶ。そのさまをながめてため息をつく。贅沢な時間だと思います。

辞書を引くだけの人もいるでしょう。辞書を読む人もいるでしょう。ながめる人もいます。辞書に物語を読む人もいるでしょう。辞書を読んで詩をつくる人がいても驚きません。

＊

あらわれる。でる。ぼんやり、ぼやっと、はっきり、くっきり。なぞる。のこる。つたえる。うつす。

ないものが形をとることで、のこり、うつし、つたえることができる。辞書で figure という単語の欄をながめながら、言葉とイメージを転がす。そこにあらわれるかたちともように、何語であるかとか、品詞が何であるかなんて関係ない気がします。ただわくわくしてうつくしいとしか言いようがありません。

※参考資料：ランダムハウス英和大辞典（小学館）、リーダーズ英和辞典（研究社）、ジーニアス大英和辞典（大修館）。

魔法のバトンは回る

＊

言葉を誘い出す言葉、そんなおまじないみたいな言葉があればうれしいですよね。

自動書記（自動筆記）とかオートマティスムという考え方があって、何かに取り憑かれたみたいに文章があれよあれよと書ける状態があるそうです。言葉が言葉を呼んで、連想形式にどんどん言葉が出てくるのでしょうか。

それは極端な例ですが、ある言葉がいわば誘い水になって、言葉が続いて出てくることはたまにあります。また、とりあえずのタイトルや、とりあえず書いた出だしにうながされることも、たまにあります。

note で見かけたある記事を思い出しました。

誰の記事だったか、忘れたのですが、「おばんです」で始まる記事があって、思わず微笑んだことがありました。いまもまた頬が緩みました。あれは、いいですね。何だか、ほのぼのとした気持ちになります。方言の挨拶ですね。どこの方言なのでしょう。

駄洒落を言うつもりはないのですが、近所の気さくなおばん、つまりおばさんから挨拶されているような感じがします。書いていたのが男性なのか女性なのか、はっきりと覚えていないのですが、女性で、それも四十歳以上ではないかと勝手に想像して読んでいました。

＊

note では書き手の性別が分からないことが多いのですが、みなさんはどうですか？
どうやら私は性別を察するのが苦手です。そもそも日常生活でも人生においても人付き合いがきょくたんに少ないのです。生まれてこの方ずっとそうでした。

　そのせいか人を覚えるのに苦労します。顔が覚えられないし、名前が覚えられないのです。まして、ネット上だとよけいにわけが分からなくなります。人を覚える容量がかなり少ないみたいです。

　最近でもありました。ずっと男性だと思っていたフォロワーさんがどうやら女性のようだと気づきました。その逆も前にありました。あとは、性別が不明なまま記事を読んだりコメントをし合っている場合も多々あります。

　心当たりのある方は、ごめんなさい。とんちんかんなコメントをしたにちがいありません。心当たりのない方は、引き続き曖昧なままのお付き合いをお願いします。

＊

「おばんです」のほかに「僕です」「こんにちわ」（こんにちはではないのですが、こういう表記はチャーミングで好きです）「お元気ですか？」「ヤッホー！」「お邪魔します」という出だしも見かけた記憶があります。ああやって、一種の景気づけをして勢いをつけているのだろう、そんな気がしました。

「おつかれさまでーす」なんてバイト先での挨拶みたいでいいですね。「どうもー」なんて返したくなります。

　もっと変わったと言うか、奇抜な出だし（文中や終り方にも癖が見られます）や書く時の癖にも気づいているのですが、ユーザーさんが特定されそうなのでやめておきます。だいいち失礼ですよね。

「あなたには、こういう癖がありますね」なんて、ふうつは赤の他人から言われたくはないです。私も嫌です。それにもかかわらず、私はなぜかそういうところにやたらと目が行くのです。性格の問題でしょうね。

　書き出しや文中や終り方の癖やパターンは本人が気づいていなかったり、意識していない場合が多いようです。それでいいのだと思います。あまり意識すると、かえって書けなくなるかもしれませんね。意識的な行為であるルーティーンとはちょっと違うようです。

＊

私は「です・ます調」で書くことが多いのですが、同じく敬体で書かれた文章を見ていると、それにつられて文章が書けそうになることがあります。

この文体は私の中では敬体という感じではなく、語りかける感じの口語体であり、これで書きはじめると、誰かに話している心境にすっと入ることができます。

べつに言文一致をめざしているわけではありませんが、私にはなるべくふだんの話し方に近い文体で書きたいという気持ちがあります。とくにエッセイはそうです。「だ・である調」だと私には書き言葉に感じられるのですが、それはそうした話し方をふだんしていないからです。

小説では子ども向けの作品をのぞき常体で書いています。ただし「である」を避けます。この語尾が苦手なのです。できれば「だ」も避けたいのですが、そうもいきません。でも、減らすことはできます。

「だ」と「である」を避けた「だ・である調」（常体）なんて変かもしれませんが、げんにそうやって書いています。ひとさまの文章を読んでも、けっこうそうした文体で書かれている気がします。「だ・である調」というネーミングに問題があるのかもしれません。

＊

以前に「言葉は魔法」というシリーズを書いていたことがあるのですが、「言葉は魔法」と書くとなぜか言葉が出てきて記事が書けました。まさに魔法みたいな言葉だったのです。

いまはその魔法が解けたみたいで、「言葉は魔法」と書いても、そのあとが続きません。言葉を呼び出す魔法の言葉にも「賞味期限」や「消費期限」があるようです。

じつは「言葉は魔法」に代わる新しいおまじないの言葉を、最近見つけました。その

言葉というかフレーズを書いて、ちょっと待っていると書けるような気配があって、そのきっかけを逃さず書きはじめるのです。

　ただし、その言葉が冒頭にあるまま投稿するのも変なので、記事を書きおわったあとにそっと消します。「お世話になりました。ありがとうね」とつぶやきながら。その言葉なのですが、ここまでの文章の中に出ています。どれだと思いますか？　　じらすのはやめて白状しますが、「おばんです」なのです。

　これを書くと、なんか、こう文章がふわっと出てくるのです。不思議です。いまのところ「消費期限」は切れていないようなのでうれしく思っています。もしこの魔法がきかなくなったら、この記事を読んでいる誰かがつかいはじめたのだろうと理解して、べつのを探すつもりです。魔法のおすそ分け。魔法のバトンは回る。

　お試しあれ。

夜になると「何か」を手なずけようとする

＊

人は長方形に囲まれて生きている気がします。生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、ＰＣ、スマホ.....。

人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

人は自分（あるいは自分の中にあるもの）に似たものをつくり、しだいにその自分のつくったものに似てくる、似せてくる、とつねに感じているのですが、人は「自分のつくったもの」に「自分もどき」を見て初めて、「自分そのもの」に気づくのではないか、なんて考えてしまいました。

そのひとつが長方形の枠ではないでしょうか。

＊

長方形というと、ひとりでいる場所をイメージしてしまいます。上で述べた長方形の場所や「容れ物」ではひとりでいない場合のほうが多いのにです。たぶん、多くの人に囲まれていても人はひとりでいるという気持ちが強くあるからだと思います。

寝床、ベッド、布団、病床、シーツ、ストレッチャー、トイレの個室、棺桶、お墓、遺影。こうした場や容れ物にひとりでいる人が頭に浮かびます。誰かに似ていますが、想像の中にあるその顔は見えません。見たくないのかもしれません。

意識だけとか目だけになって道を進むさまが、寝入り際によく浮かぶのは車に乗っている時を思いだしているのかもしれません。道は、たとえそれが獣道であっても、舗装された道路であっても長方形を延長していったものに見えます。

テレビにしろ、映画にしろ、液晶画面にしろ、本にしろ、車窓にしろ、枠があり、その枠はほぼ横に長い四角に見えます。視界もほぼ横長の楕円形に思えます。その横に長い長方形の枠のある光景を見ながら、人は生きていく。そのあいだに枠を意識することはまれにしかない。

こういうのはこじつけなのでしょうが、こじつけというＡをＢに置き換える作業が、視覚や知覚全般の根底にあり、たとえば言語活動や広義の比喩や印象やイメージという形で、人においてあらわれているのだと思われます。目だけでなく、また意識だけでなく、魂の働きだという気もします。無媒介的に世界と触れあうことができない以上、人間は置き換えるという形で遠隔操作するほかないのです。

＊

外に出て、海、山、川、草、木に目を転じると意外と長方形や四角がないのに気づきます。長方形が見えるなあと思うと、たいてい人がつくったものなのです。そうしたものには角があるのです。

やっぱり長方形は人の中にあるのではないかとますます思えてきます。「川は道と同じで長方形を延長していったものに見えるよね」と言ったあなたに四角い座布団一枚。

空を見ても長方形は見当たりません。楕円形っぽい長方形にも見える視界の枠が感じられるだけ。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものがない。

自然の風景を窓や写真やスクリーンや画面という枠の中でしか見なくなってきていることを寂しく思います。

＊

こじつける。こじつけ。

「何か」を「何か」に置き換えないと人は壊れしまうのでしょう。前者の「何か」はあえて言うなら恐怖であり不安でしょうが、本来は言葉にならないはずのものです。後者の

「何か」は言葉に近い「何か」であり、人にとっては親しいものにちがいありません。

　名づけられないものを手なずける。こうした仕組みがあることに感謝するしかない、そんな敬虔に似た心もちになります。

　そう、感謝すべきなのでしょう。生きているとこの仕組みに不調が起きる場合がままあるからです。そうなると人生はつらく苦しいものになりますが、年を取ったいま、それが身にしみるのです。

　目をつむると、とりとめのない模様や景色に置き換わった何かが浮かんでいます。それが何かなんて考えないでその光景に染まっていくと心が安らぎます。名づけられない「何か」にはそうした効用もあるようです。有り難いことに。

「何か」ではないもの――こう名づけた瞬間にもう「何か」なのかもしれませんが――と「何か」のあいだで、私はいま「何か」を、こうやって言葉とイメージに置き換え、手なずけ、飼いならそうとしているにちがいありません。

　きっと怖いからです。不安だからです。間違いありません。いつか必ず来るはずの「何か」に備えて心の準備をしているのかもしれません。

うつせみのあなたに　短文集　その３

著　　星野廉

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社